

矢加部町屋敷遺跡Ⅱ

福岡県柳川市矢加部所在遺跡の調査

2010

福岡県教育委員会



1. 46号土坑柱検出状況
(北西から)



2. 同上中位検出状況
(東から)



3. 同上下位検出状況
(東から)

序

ここに報告する矢加部町屋敷遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査された遺跡です。

本書は平成18年度に発掘調査を実施した、福岡県柳川市矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡の記録で、矢加部町屋敷遺跡調査報告の2冊目に当たります。

本遺跡は江戸時代の街道である「久留米柳川往還道」沿いに位置しています。調査では江戸時代の街道沿いの町屋跡とその遺構・遺物が明らかになり、江戸時代前期から明治時代に至る建物に伴うカマド・井戸・溝・ゴミ穴などに加えて、藩境木と考えられる遺構を確認するなど、町矢加部集落の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成22年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 森山 良一

例言

- 1 本書は平成 18（2006）年度に有明海沿岸道路建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県柳川市矢加部字町屋敷に所在する矢加部町屋敷遺跡の記録で、有明海沿岸道路建設関係埋蔵文化財調査報告では第9集、矢加部町屋敷遺跡調査報告書としては第2冊目に当たる。
- 2 本書では4次調査西区の遺構を報告し、来年度4次調査西区の遺物と、4次調査東区、5次調査区を報告する予定である。
- 3 本遺跡の発掘調査・整理報告は国土交通省九州整備局福岡国道事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 4 本書に掲載した遺構写真は秦憲二が撮影した。なお、空中写真は九州航空株式会社に委託した。
- 5 本書に掲載した遺構図は秦憲二が作成し、荒巻静美・古賀富士子・原秀美が補助した。なお、掲載した遺構図の方位は全て日本座標の座標北（G. N.）である。
- 6 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
- 7 本書は、秦が執筆・編集を行った。

本文目次

卷頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

I.	はじめに	1
1.	調査の経緯	1
2.	調査の組織	2
II.	位置と環境	3
III.	調査の内容	6
1.	調査の概要	6
2.	4次調査西区	6
1)	遺構	6
a)	土坑・大土坑	6
b)	焼土坑	32
c)	カマド	32
d)	埋甕遺構	36
e)	井戸	37
f)	溝状遺構	38
IV.	まとめ	40

図版目次

卷頭図版 1	1. 46号土坑柱検出状況（北西から）
	2. 同上中位検出状況（東から）
	3. 同上下位検出状況（東から）

図版 1	1. 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区北半全景（南西から）
	2. 同上南半東部（北東から）

図版 2	1. 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区南半全景（上空から）
	2. 同上北半（上空から）

図版 3	1. 1号土坑（南から）	2. 1号土坑土層断面（南東から）
	3. 3号土坑（北西から）	4. 4号土坑（南東から）

- | | | |
|------|------------------------------|----------------------|
| | 5. 4号土坑土層断面（南東から） | 6. 5号土坑（北から） |
| | 7. 5号土坑土層断面（南東から） | 8. 6号土坑（南東から） |
| 図版4 | 1. 7号土坑（北西から） | 2. 7号土坑土層断面（北東から） |
| | 3. 8A・B号土坑（北から） | 4. 9号土坑（北から） |
| | 5. 9号土坑土層断面（北から） | 6. 10号土坑（北から） |
| | 7. 10号土坑土層断面（北から） | 8. 11号土坑・1号井戸（西から） |
| | 9. 11号土坑土層断面（東から） | |
| 図版5 | 1. 12号土坑（北東から） | 2. 13号土坑（北から） |
| | 3. 14号土坑（東から） | 4. 14号土坑土層断面（西から） |
| | 5. 15号土坑（西から） | 6. 15号土坑土層断面（南東から） |
| | 7. 18号土坑（西から） | 8. 18号土坑土層断面（東から） |
| 図版6 | 1. 19号土坑（北西から） | 2. 19号土坑土層断面（西から） |
| | 3. 21号土坑（北から） | 4. 21号土坑土層断面（北東から） |
| | 5. 25号土坑（西から） | 6. 25号土坑土層断面（南から） |
| | 7. 26号土坑（南西から） | 8. 35号土坑（北西から） |
| 図版7 | 1. 32号土坑（北西から） | 2. 39号土坑（北西から） |
| | 3. 41号土坑（北西から） | 4. 42号土坑（北東から） |
| | 5. 36・43・49号土坑（上空から） | |
| 図版8 | 1. 33・44号土坑遺物出土状態1（北西から） | 2. 同上2（南東から） |
| | 3. 同上3（南東から） | |
| 図版9 | 1. 46号土坑土層断面（北から） | 2. 46号土坑柱部検出状況（北西から） |
| | 3. 46号土坑基礎部上位検出状況（東から） | 4. 同左下位検出状況（東から） |
| | 5. 48号土坑（東から） | 6. 48号土坑土層断面（東から） |
| | 7. 49号土坑（西から） | 8. 49号土坑土層断面（西から） |
| 図版10 | 1. 50号土坑（南東から） | |
| | 2. 50号土坑土層断面（南東から） | |
| | 3. 51・52・78・80号土坑（上空から） | 4. 54号土坑（南東から） |
| | 5. 54号土坑土層断面（北西から） | 6. 56号土坑（南西から） |
| | 7. 57・58号土坑（南西から） | 8. 57号土坑（南東から） |
| 図版11 | 1. 60号土坑（西から） | 2. 60号土坑土層断面（北から） |
| | 3. 61号土坑（北西から） | 4. 61号土坑土層断面（北西から） |
| | 5. 62号土坑（西から） | 6. 63号土坑（南西から） |
| | 7. 63号土坑土層断面（南西から） | 8. 64号土坑土層断面（南から） |
| 図版12 | 1. 57・58・64号土坑、4・5号大土坑（上空から） | |
| | 2. 64号土坑土留構造（南から） | |
| 図版13 | 1. 66号土坑（北西から） | 2. 66号土坑土層断面（北西から） |
| | 3. 67号土坑（北西から） | 4. 67号土坑土層断面（北西から） |
| | 5. 68号土坑（北西から） | 6. 68号土坑土層断面（北から） |

	7. 69号土坑土層断面（北から）	8. 71号土坑（北東から）
	9. 71号土坑土層断面（南西から）	
図版 14	1. 72・74・81・83・90号土坑（上空から）	2. 73号土坑（北西から）
	3. 73号土坑（北東から）	4. 75号土坑（南西から）
	5. 75号土坑土層断面（南西から）	6. 76号土坑（南東から）
	7. 79号土坑（南西から）	8. 80号土坑（南東から）
	9. 82号土坑（南東から）	
図版 15	1. 83号土坑（北西から）	2. 同上（南西から）
	3. 同上土層面・同上土層断面（北西から）	4. 87号土坑（南東から）
	5. 88号土坑（北東から）	6. 88号土坑土層断面（南西から）
	7. 89号土坑（上空から）	8. 91号土坑（南西から）
図版 16	1. 2号大土坑（南西から）	2. 2号大土坑土層断面（北から）
	3. 4号大土坑出土状態（北西から）	4. 64号土坑・6号大土坑（南西から）
	5. 4号大土坑（南西から）	6. 5号大土坑出土状態（北西から）
	7. 6号大土坑（北西から）	
図版 17	1. 4・5溝状遺構（上空から）	2. 2号焼土坑（東から）
	3. 2号焼土坑土層断面（西から）	4. 1～5号カマド遺構（南西から）
図版 18	1. 3～7号カマド遺構（北西から）	2. 5号カマド遺構（南東から）
	3. 8号カマド遺構（南西から）	4. 9号カマド遺構（西から）
図版 19	1. 10号カマド遺構（南西から）	2. 10号カマド遺構土層断面（南西から）
	3. 11号カマド遺構（南西から）	4. 12～14号カマド遺構（南西から）
	5. 15・16号カマド遺構（南西から）	
図版 20	1. 1号埋甕（西から）	2. 2号埋甕（北から）
	3. 7号埋甕（東から）	4. 8号埋甕（南から）
	5. 10号埋甕（北から）	6. 1号溝状遺構土層断面（北西から）
	7. 4号井戸（南から）	

fig 目次

fig 1. 藩境木跡石碑（西から）

挿図目次

第1図	矢加部町屋敷遺跡調査範囲図（1/4,000）	1
第2図	周辺遺跡分布図（1/50,000）	4
第3図	矢加部町屋敷遺跡4次調査区西区遺構全体図（1/200）	5
第4図	1・3～5号土坑実測図（1は1/80、他は1/60）	7
第5図	6～9・23・24・39号土坑実測図（3は1/90、他は1/60）	9

第 6 図	10・11・13・14・15・17・18・42 号土坑実測図 (1/60)	11
第 7 図	16 号土坑、3 号大土坑実測図 (1 は 1/60、2 は 1/30)	12
第 8 図	19・21・22・25・26 号土坑、2 号大土坑実測図 (2・4 は 1/80、他は 1/60)	13
第 9 図	27・30・33・35・38 号土坑実測図 (1/60)	17
第10図	37・40・41・43・46 号土坑実測図 (1/60)	19
第11図	47～51・55 号土坑実測図 (1/60)	21
第12図	53・54・56～58・60・62 号土坑実測図 (5 は 1/80、他は 1/60)	23
第13図	61・63 号土坑実測図 (1/60)	24
第14図	64 号土坑、4・5 号大土坑実測図 (1/60)	24-25
第15図	66～69・71・73 号土坑実測図 (1/60)	25
第16図	5 号大土坑底出土状態実測図 (1/30)	26
第17図	75・79・83～85 号土坑実測図 (4 は 1/120、他は 1/60)	27
第18図	86～88 号土坑実測図 (1/60)	29
第19図	89～92 号土坑・6 号大土坑実測図 (1 は 1/120、他は 1/60)	30
第20図	2 号焼土坑実測図 (1/30)	32
第21図	1～7 号カマド実測図 (1/40)	33
第22図	8～16 号カマド実測図 (1/40)	35
第23図	2・10 号埋甕実測図 (1/30)	37
第24図	1 号溝状遺構土層断面図 (1/40)	38
第25図	遺構変遷図 1 (1/300)	42
第26図	遺構変遷図 2 (1/300)	43
第27図	柳川市有明町松藤キヨ氏宅復原図 (『福岡県の民家』より)	44
第28図	46 号土坑木組模式図	45
第29図	久留米・柳河両藩立会境木建絵図 (大川市誌より)	46
第30図	久留米市両替町遺跡カマド遺構図	47



fig 1 矢加部地区藩境石

I はじめに

1 調査の経緯

ここに報告する遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴って発掘調査されたものである。有明海沿岸道路は福岡県大牟田市から柳川市・大川市を経由して、佐賀県鹿島市に至る概略延長55kmの国道208号のバイパス路線であり、高規格道路として整備され、渋滞解消とともに佐賀空港や三池港などの交通拠点と連結するもので、地域間流通の活性化のため早期建設が望まれていた。

平成6（1994）年12月16日計画路線として指定され、路線は大牟田高田道路・高田大和バイパス・大川バイパスに区分されている。大川バイパスは柳川市三橋町徳益から大川市大野島までの延長10.0km区間であり、平成10（1998）年12月18日に柳川市三橋町徳益から柳川市西蒲池までが整備区間が指定された。

平成12（2000）年10月28日に建設工事が起工された。このうち大牟田市から大川市にいたる区間は暫定供用区間とされ、平成20（2008）年3月29日に、大牟田ICから大川中央IC（23.8km）の内、高田ICから大和南ICを除く21.8kmが暫定開通。平成21（2009）年3月14日には全区間が暫定供用されている。

平成12（2000）年11月16日付で、国土交通省九州地方建設局福岡国道事務所から福岡県教育庁文化財保護課に対し、この区間に係る埋蔵文化財の有無確認の依頼があり、これを受け同課が柳川市矢加部地区について平成15（2003）年10月6から8日に試掘調査を実施した。その結果、江戸時代の溝や土坑などが確認され、本調査が必要と判断された。

まず、県道側の用地取得が終了した範囲について、平成16（2004）年6月15日から10月4日に矢加部町屋敷遺跡1次調査として本調査を実施し、県道西側のクリークの高架工事を行う必要が生じたことから、2次調査を平成16（2004）年6月15日から10月4日に、3次調査を平成17（2006）年3月17日から4月24日に実施した。4次調査については、県道東側で柳川農林事務所が工事用地内のクリークの付け替え工事を先行して行うため、県道東側の用地内に工事用道路を設置することから西側を調査することとなり、平成18年5月9日から平成19年1月30日に実施した。引き続いて、平成19年2月5日に東側の北端に着手した。

調査成果については、平成18年度調査のうち西側の調査区について報告書作成業務を行うことで協議が整った。



第1図 矢加部町屋敷遺跡調査範囲図（1/4,000）

2 調査の組織

遺跡の発掘調査・整理報告に関わる平成16から19・21年度の関係者は次のとおりである。

国土交通省九州地方整備局国道事務所

所長	平成16年度 増田 博行	平成17年度 増田 博行(～H17.8.1) 小口 浩(H17.8.2～)	平成18年度 小口 浩	平成19年度 小口 浩	平成21年度 森山 誠二
副所長	後田 徹 徳留 忠	後田 徹 佐々木英明	春田 義信 佐々木英明	春田 義信 佐々木英明(～H19.6.30) 桑林 正純(H19.7.1～)	白川 逸喜
建設監督官	松尾淳一郎	松尾淳一郎 今村 隆浩 鶴林 保彦	今村 隆浩 鶴林 保彦	今村 隆浩 鶴林 保彦	山北 賢二 鶴林 保彦
調査第二課長 調査課長 調査係長	小椎尾 優 長友 浩信	鈴木 昭人 松木 厚廣	鈴木 昭人 松木 厚廣(～H18.9) 川原 一哲(H18.10～)	鈴木 昭人 川原 一哲	今里 英美 矢野 幸樹
専門員 国土交通技官 工務課長	相島 伸行 柳瀬 純矢 田中秀之進	相島 伸行 柳瀬 純矢 堀 康雄	伊東 良二 谷川 勝 堀 泰雄	伊東 良二 谷川 勝 堀 泰雄(～H19.6)	田中 博明 猿澤宗一郎 今田 一典

福岡県教育委員会

	平成16年度 (発掘調査)	平成17年度 (発掘調査)	平成18年度 (発掘調査・整理)	平成19年度 (発掘調査・整理)	平成21年度 (整理報告)
総務部 括長 総務次長 総務課長 文化財保護課長 副課長 参考事務課長	森山 良一 三瓶 寧夫 清水 圭輔 井上 裕弘	森山 良一 森山 主輔 中原 一憲 井上 裕弘	森山 良一 清水 主輔 大島 和寛 磯村 幸男 井上 裕弘	森山 良一 橋崎洋二郎 大島 和寛 磯村 幸男 井上 裕弘	森山 良一 平川 昌弘 池邊 元明 小池 史哲
参考事務補佐 参考事務課長 参考事務補佐	川述 昭人 木下 修 新原 正典	川述 昭人 木下 修 新原 正典	佐々木隆彦 池邊 元明 小池 史哲 新原 正典	佐々木隆彦 池邊 元明 小池 史哲 新原 正典	佐々木隆彦 池邊 元明 小池 史哲
参考事務佐佐 参考事務佐佐	久芳 昭文 安川 正郷		安川 正郷	中蘭 宏	前原 俊史

庶務

参事補佐委員会長 管事務主査事 主事主任主査事	古賀 敏生 福尾 茂 井手 優二 井手 優二 井手 優二	宮崎 志行 宮崎 志行 野中 顯 野中 顯 野中 顯	宮崎 志行 石橋 伸二 柏木 正央 柏木 正央 柏木 正央	宮崎 志行 木竹 元 木竹 元 木竹 元 木竹 元	富永 育夫 近藤 一崇 野田 雅

調査・整理・報告

参考事務補佐 参考事務補佐 参考事務補佐 参考事務補佐	中間 研志 秦 恵二	中間 研志 秦 恵二	飛野 博文 濱田 信也	飛野 博文 濱田 信也	飛野 博文 新原 秦

なお、発掘調査及び整理期間中には、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所・有明海沿岸道路出張所・柳川市教育委員会をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得ることができた。特に、発掘作業員として参加された地元を中心とする多数の方々には、悪天候、悪条件の中、御協力いただいた。また、地元の方々にはひとかたならぬ御理解をいただき、無事に発掘調査を終了することができた。ここに深甚の謝意を表します。

II. 位置と環境

地理的環境

遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部の有明海沿岸部に位置しており、平成17年2月5日付けて柳川市・三橋町・大和町と合併し、現柳川市となった。柳川市域は矢部川の支流である沖端川・塩塚川によって形成された有明粘土を基盤とする沖積地であり、標高10m以下の低平な平地である。

本遺跡の所在する矢加部地区は柳川市の北東端の微高地上に展開する村矢加部集落の南西にあり、調査地点の町矢加部は県道23号線沿いに所在する。

歴史的環境

柳川市域に集落が進出したのは弥生時代中期からで、市北部では蒲池遺跡群（注1）を拠点的な集落として、微高地上に小集落が点在していたようだ。西蒲池扇ノ内遺跡（注2）では支石墓の上石と見られる巨石が発見されており、三島神社楼門前の石橋に使用された1枚石もこの巨石の1つといわれている。このほかに発掘調査の行われた弥生時代の遺跡としては、中期の磯鳥フケ遺跡（注3）、後期の蒲船津江頭遺跡（注4）がある。

古墳時代・古代の遺跡はほとんど見られず、遺跡が増加するのは中世になってからである。柳川市北部地域に勢力をもった蒲池氏の居城である蒲池城が造られ、周辺には東蒲池門前遺跡（注5）や中世前期の東蒲池大内曲り遺跡（注6）・東蒲池櫻木遺跡（注7）、中世後期の矢加部南屋敷遺跡（注8）などの中世遺跡が確認されている。

戦国時代末期に、蒲池地区を本拠地として勢力をもっていた蒲池氏が滅亡し、天正15（1587）年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三瀬・下妻・山門の三郡を支配した。立花氏はその後関ヶ原の戦いで西軍に与して改易となり、替って田中吉政が筑後国主となり、慶長6（1601）年に入封した。

田中吉政は「慶長本土居」の建設、堀割の掘削、街道整備などの多くの土木事業を行い、領国整備に努めた。慶長本土居は、慶長7年（1602）に柳川市大和町鷹尾から大川市酒見に及ぶ堤防を補強した総延長32キロメートルに及ぶ干拓堤防で、この「慶長本土居」を起点として、その後の干拓が行われることになる。堀割は、飲用、農業用、舟運や戦時の防衛の目的で整備しており、市内の水路の総延長は、実に470キロメートルものばる。この堀割が現在の「水郷柳川」の景観を形成している。

街道整備については、藩内に一里石を築いたとある。現在するもので、瀬高街道の一里石（三橋町下久末）、福島街道（矢部往還）の三里石（瀬高町壇の池）、三池街道の一里石（大和町豊原）、二里石（高田町渡瀬）、南関街道の三里石（山川町野町中村病院角）が残っている。ほかに伝馬の駅が作られ、旅行者に交通の便を与えた。本遺跡の中央を走る県道23号線は、「久留米柳川往還」と呼ばれる街道であり、田中吉政が整備したことから「田中道」とも呼ばれる。三橋町の柳河地区では、道路の両側に大きな溝を伴う、旧状が残された部分を見ることができる。

田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が、久留米藩は有馬氏が領有した。本遺跡の所在する矢加部地区は藩境となり、街道上に関所と藩境木が設置さ

れた。現在も藩境木跡の石碑が残されている。(fig 1 参照)

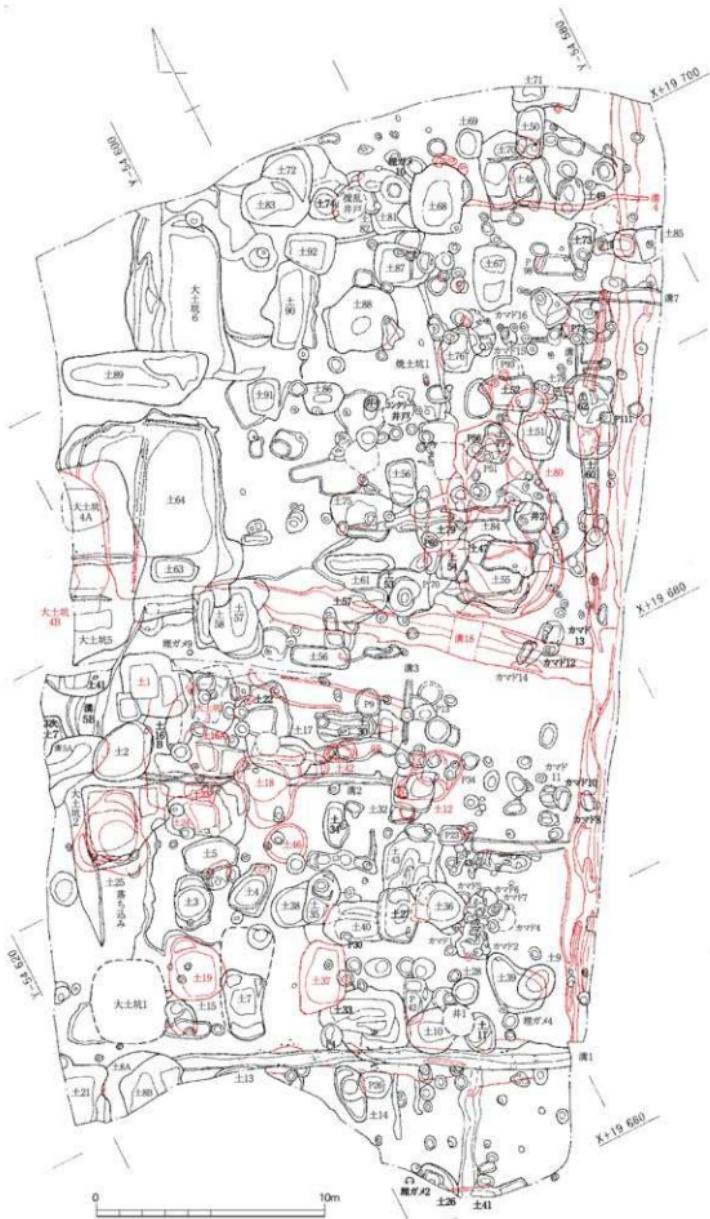
注

1. 福岡県教育委員会 1978『福岡県遺跡等分布地図』(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)
2. 前掲注 1
3. 柳川市教育委員会 2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第 1 集
4. 福岡県教育委員会 2009『蒲船津江頭遺跡 I』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 6 集
5. 福岡県教育委員会で整理中
6. 福岡県教育委員会 2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 2 集
7. 福岡県教育委員会 2005『東蒲池桜町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 1 集
8. 福岡県教育委員会 2009『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 5 集



1 矢加部町屋敷遺跡	14 蒲池城跡	27 横益八ツ枝遺跡	40 地蔵堂遺跡	53 田舎明代地区条里遺跡
2 矢加部五反田遺跡	15 蒲池城空跡	28 今古賀城跡	41 ヘーダカサン遺跡	54 条里跡
3 矢加部南屋敷遺跡	16 三島神社貝塚	29 進井出遺跡	42 日渡遺跡	55 鹿共堤防
4 王垂命神社遺跡	17 蒲池城跡群	30 浮島天神遺跡	43 一本松遺跡	56 柳川城郭
5 阿弥陀屋舎遺跡	18 西蒲池下里遺跡	31 新開間遺跡	44 帝太郎遺跡	57 新町遺跡
6 磯鳥フケ遺跡	19 尾ノ内遺跡	32 西馬場遺跡	45 松の木三十六遺跡	58 線工三遺跡
7 東小路遺跡	20 西蒲池古津遺跡	33 江崎城跡	46 サヤキト遺跡	59 坂本新遺跡
8 南矢ヶ部遺跡	21 西蒲池押笠坊遺跡	34 畠見古墳	47 中村遺跡	60 柳川城跡
9 南矢ヶ部遺跡	22 西蒲池古塚遺跡	35 畠見遺跡	48 大藪条理遺跡	61 国指定名勝松譲園
10 東蒲池桜町遺跡	23 古井長水遺跡	36 畠見城跡	49 天満宮遺跡	62 県指定建造物戸島邸
11 東蒲池大内曲り遺跡	24 蒲船津江頭遺跡	37 大坪遺跡	50 江鶴遺跡	63 国指定名勝戸島氏庭園
12 東蒲池蓮池遺跡	25 蒲船津水町遺跡	38 白鳥城跡	51 上久木城跡	64 久留木・柳川往還
13 東蒲池門前遺跡	26 蒲船津西ノ内遺跡	39 東中道遺跡	52 堀口遺跡	

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



第3図 矢加部町屋敷遺跡4次調査区西区遺構全体図(1/200)

III. 調査の内容

1. 調査の概要

矢加部町屋敷遺跡は、県道23号久留米柳川線沿いに南北に細長く展開しており、有明海沿岸道路はその北部を横断して建設されるため、調査対象範囲は県道の東西に分かれた。用地取得状況と工事工程に応じて、調査対象範囲内を複数年度に渡り分割して調査実施することになり、今回報告する4次調査区は県道西側部分東側にある。

4次調査区は柳川市矢加部字町矢加部670-3・670-4・696-1・697-1・698-1・669-1・700-1・701-2・702-2番地、字橋本4-1・2、5番地の一部1,820m²である。平成18(2006)年5月9日に重機により南半部の表土剥ぎを開始し、5月15日から作業員を投入した。5月18日には福岡県文化財保護課の安全パトロールが行われた。9月29日に南半部の空中写真を撮影した。10月4日に埋め戻しを始め、10月12日には北半部の表土剥ぎに着手した。12月23日に地域住民向けの現地説明会を実施し、20人ほどの来場者があった。1月19日に空中写真の撮影を行い、1月30日に埋め戻しを完了した。その後、県道東側に着手した。

2 4次調査西区

矢加部町屋敷遺跡4次調査西区では、土坑92基、大土坑6基、溝状遺構8条、カマド遺構16基、焼土坑2基、井戸4基、埋甕10基が検出された。南半部南西には明治期の整地層と見られる黒色土包含層が広がっており、この黒色土を埋土とする遺構が見られた。遺構面は東側は基盤層で、西側は黄灰色土の整地層であった。この黄灰色包含層の下から検出される遺構あり、整地されたものと考えられる。北部は遺構が少なく見えるが、これは削平のためである。

今回は、このうち遺構について報告し、遺物については次年度掲載するものとする。

1) 遺構

a) 土坑・大土坑

土坑92基のうち、2号土坑はほとんどが木の根に覆われており、構造がわからない状態であったため、掲載しないものとした。種子が多く出土した12号や、16・28・29・31・32・34・36・44・45・52・59・65・70・76から78号土坑は遺物も少なく、小型の浅い土坑なので掲載しない。20号土坑は3号土坑の下位部分だったので同一遺構としたので欠番とする。22・72・74号土坑は近代に属するので除外した。また、規模の大きい土坑6基は大土坑とした。

1号土坑（図版3、第4図）

調査区中央西端部に位置し、16号土坑・3号大土坑を切る。東側につくテラスは深く掘り込むための足場であろうか。長軸288cm、短軸262cmを測り、最深部でも110cm前後を測る。上位は黒色土包含層が入り込んでおり、中位に初段の単純層が入っており、厚い層であったため、粉殻が土壤に触れず、そのままの状態で遺存していた。下位には焼土が多く混じり、棒状土製品が集中的に出土した。

出土遺物に筒形碗と腰張形碗、つまみ径の広い蓋に、これらより古い様相である崩れの少ない雨降文碗があることから18世紀後葉から末の所産である。

3号土坑（図版3、第4図）

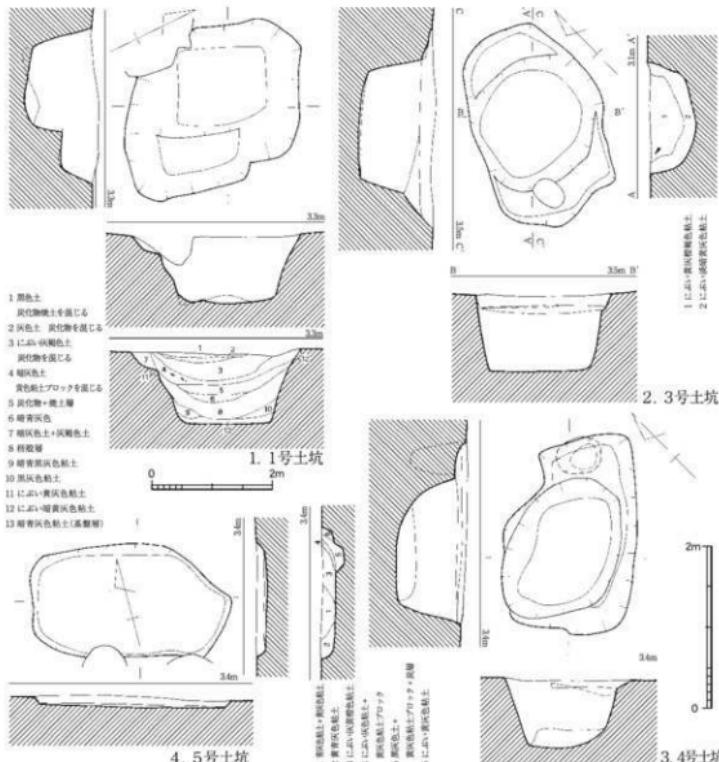
調査区南西部に位置する長方形プランで、中央部は略方形で88cm程の深さを測る。当初この中央部を20号土坑としていたが、20号土坑の上層端部が遺構の壁に達しておらず、土層を見ると上層がさらに上から堆積していることがわかったので、整理段階で同一遺構と考えた。長軸は249cm、短軸は165cmを測る。

出土遺物に端反碗と呉須の口銘を持つ菊花皿があることから19世紀中葉の所産である。

4号土坑（図版3、第4図）

調査区南西部に位置する不整形プランで、長軸は242cm、短軸84cmを測る。42cmほどの深さで床面は西部がもっとも深い。

出土遺物が少ないため不確実だが、摺鉢の口縁形態から19世紀代だろう。



第4図 1・3～5号土坑実測図 (1は1/80、他は1/60)

出土遺物が少ないため不確実だが、摺鉢の口縁形態から19世紀代だろう。

5号土坑（図版3、第4図）

調査区南西部に位置し、6号土坑を切る略長方形プランで、長軸は244cm、短軸140cmを測る。17cm前後の深さで、床面はほぼ平坦で、壁は直に立ち上がる。

出土遺物に口縁が斜めに立ち上がる唐子文様の染付杯があり、染付菊花皿の見込みのモチーフの崩れ方から、本遺構は19世紀中葉であろう。

6号土坑（図版3、第5図）

調査区中央南部に位置し、略方形に張り出し部がつく平面プランで、長軸は290cm、短軸306cmを測る。60cmほどの深さで壁は緩やかに立ち上がる。23・24号土坑を切り、5号土坑に切られる。

時期を特定できる出土遺物がないが、5号土坑に切られ、23・24号土坑を切ることから、18世紀後葉と想定できる。

7号土坑（図版4、第5図）

調査区南端中央部に位置し、中央部をコンクリート基礎に切られていた。長方形プランで長軸は現存で318cm、短軸200cmを測る。中央部は略方形で、深さは65cm前後である。埋土から、上位は掘り直されたものとわかる。中位から下位には木質層がある。

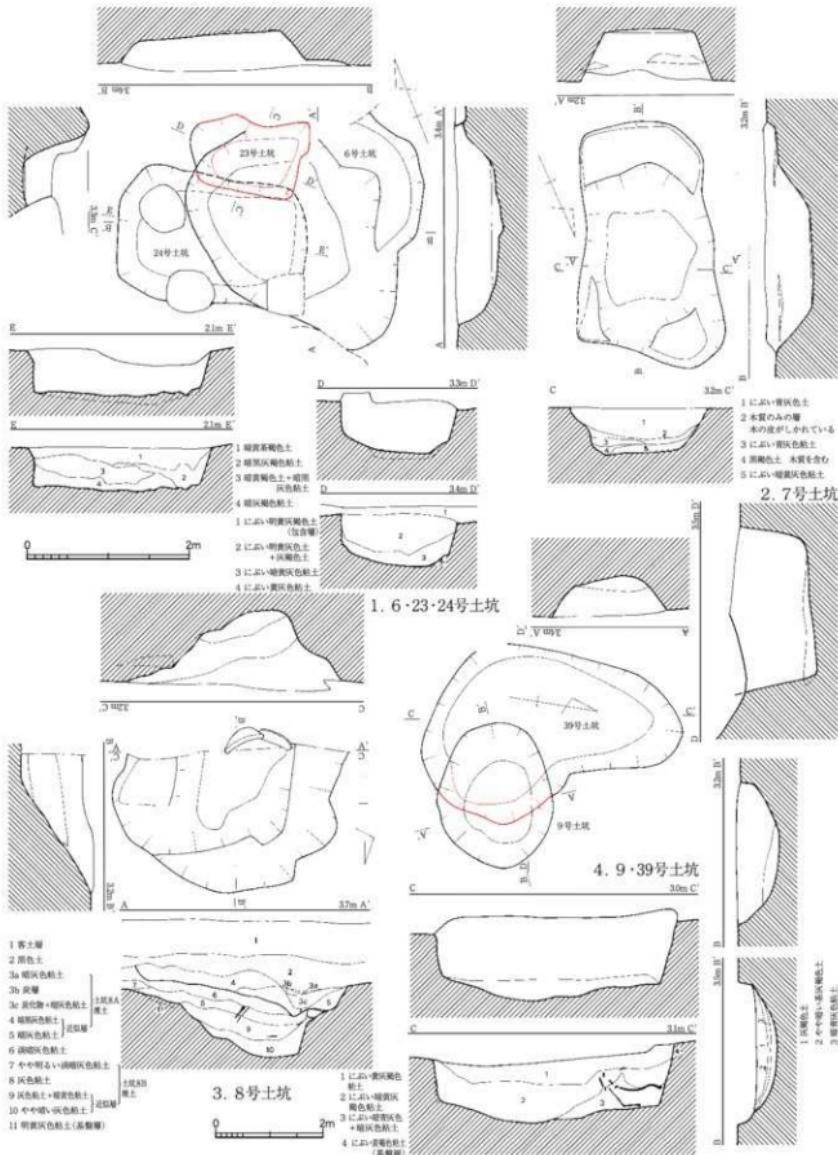
時期を特定しうる出土遺物が少ないので、見込に蛇の目釉剥ぎのある染付小皿があり、草文が幾何学的にデザイン化されているものがあることから、19世紀中葉か。

8号土坑（図版4、第5図）

調査区南西端部に位置し、21号土坑を切る。南半が調査区外に出る。楕円形プランで長軸は395cm、短軸は現存で237cmを測るが、深さは118cm前後である。3次調査の2号土坑と同一遺構。埋土から、中位の6・7層上位に黒色バンド層があり、上位を8A号、下位を8B号として分けた。当初は1基の土坑と考えていたが、上位と下位で出土遺物の時期が大きく異なることと、土層からも上位と下位の間に差異があることから、途中から上位を8A号、下位を8B号として遺物を分けて取り上げた。

8A号土坑の上位の中央部は黒色土を埋土としており、出土した1銭銅貨と完形の徳利はこの黒色土に入っていた。8B号土坑には土師質大甕片が出土したが、破片が足りないことから設置されたものが壊れたのではなく、廃棄されたと考えられる。調査区外に大半が出てしまうため、規模がわからないが、他の大土坑の配置される場所であり、深さや埋土から見て、大型の廃棄土坑だろう。

出土遺物は多くないが、8A号からは退化した花文の染付と瀬戸産陶器変形皿があることから19世紀中葉であり、黒色土による完全埋没までそれほど間はなかったようだ。8B号は系切り平底の肥前産陶器摺鉢底部、見込みに胎土目跡のつく灰釉のかかる肥前産陶器小皿、口縁が内傾し、鉄釉のみがかかる肥前産陶器の片口鉢はいずれも17世紀中葉から末なので、この時期の所産だろう。



第5図 6～9・23・24・39号土坑実測図 (3は1/90、他は1/60)

9号土坑（図版4、第5図）

調査区南東部に位置し、39号土坑を切る略正方形プランの小型土坑で、長軸は180cm、短軸は現存で141cmを測り、52cm程の深さがある。上層埋土は黒灰色粘土で、検出時には西側に偏っていたことから、西から埋没したものであろう。

出土遺物が少なく時期を特定できないが、39号土坑を切り、黒灰色土を埋土とするので19世紀中葉だろう。

10号土坑（図版4、第6図）

調査区南東端部に位置し、33号土坑・1号井戸に切られ、1号溝状造構を切る。略円形プランで、長軸は208cm、短軸は現存で191cmを測る。58cmの深さがある。床面は調査時に掘り過ぎている。

本遺構は出土遺物が少なく、時期を特定しにくいが、33号土坑に切られることから、18世紀後葉と推定できる。

11号土坑（図版4、第6図）

調査区南東端部に位置し、1号井戸に切られ、1号溝状造構を切る。楕円形プランで、長軸は184cm、短軸は現存で134cmを測る。60cm前後の深さがある。床面直上に炭化物の広がりがあった。南側の底面は掘り過ぎた。

出土遺物が少ないため時期を特定しにくいが、1号溝状造構を切っていることから、19世紀初頭か。

13号土坑（図版5、第6図）

調査区南端部に位置し、ほとんどが調査区外に出るため平面プランは不明。上位に杭2本と横木1本の構造物があるが、機能はよくわからない。現存で長軸は200cm、短軸は140cm、64cm前後の深さがある。

出土遺物は竹笹文の身の深い皿と、コンニャク印判の花文をもつ花唐草文染付碗があることから、18世紀前葉の所産である。

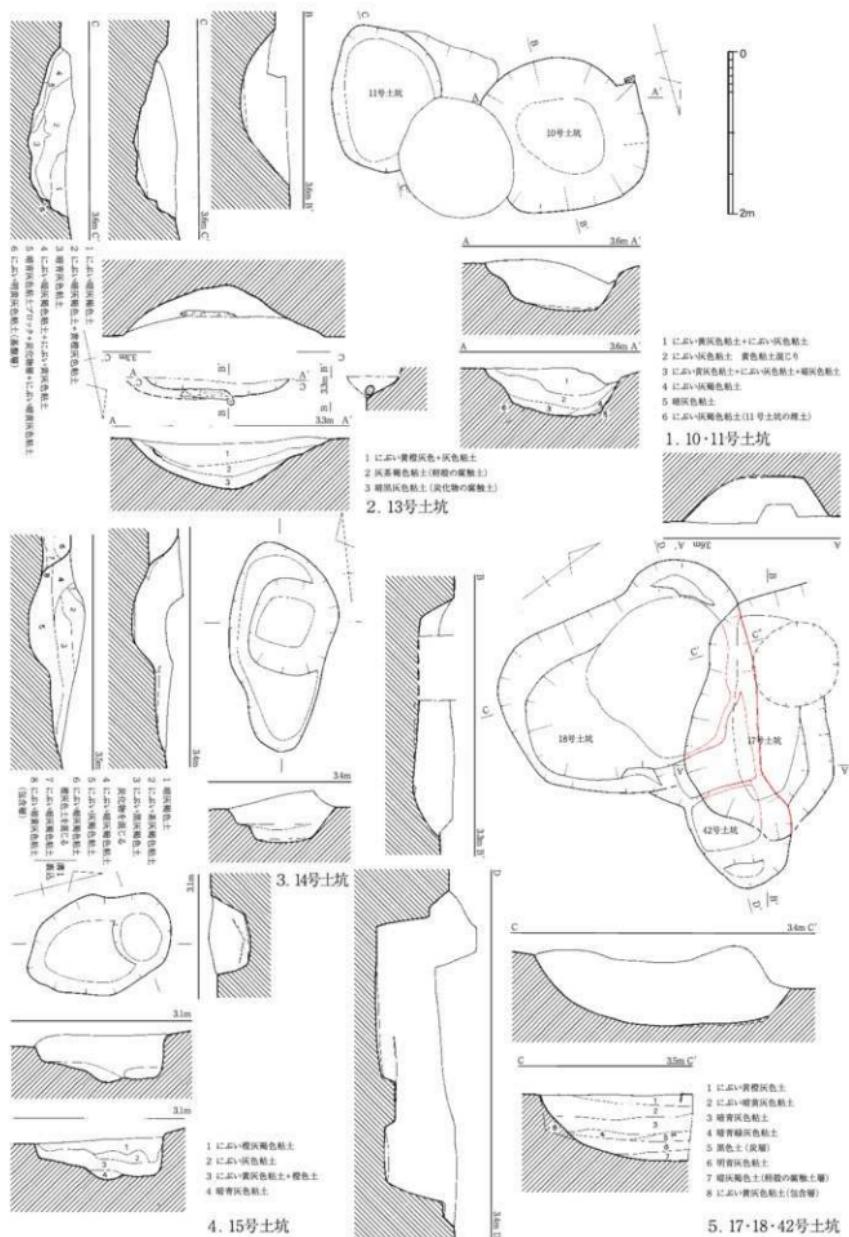
14号土坑（図版5、第6図）

調査区南端部に位置し、1号溝状造構の裏込めを切っている。中位以上は埋土が異なっているため、検出は困難だった。不整形プランで、長軸は258cm、短軸は134cmを測る。70cm前後の深さがある。

時期を特定しうる出土遺物ないが、1号溝状造構の裏込めを切っているので17世紀後半以降とはいえる。

15号土坑（図版5、第6図）

調査区南西部に位置し、1号大土坑に切られる。小型の不整形プランで、長軸は186cm、短軸は125cmを測る。65cm前後の深さがある。時期を特定しうる出土遺物はない。



第6図 10・11・13・14・15・17・18・42号土坑実測図 (1/60)

17号土坑（第6図）

調査区南西部に位置し、18号土坑を切る。22号土坑に切られる。略長方形プランで、長軸は310cm、短軸は185cmを測る。85cm前後の深さがある。

出土遺物の中に染付広東碗と染付端反碗があることから、19世紀前葉の所産である。

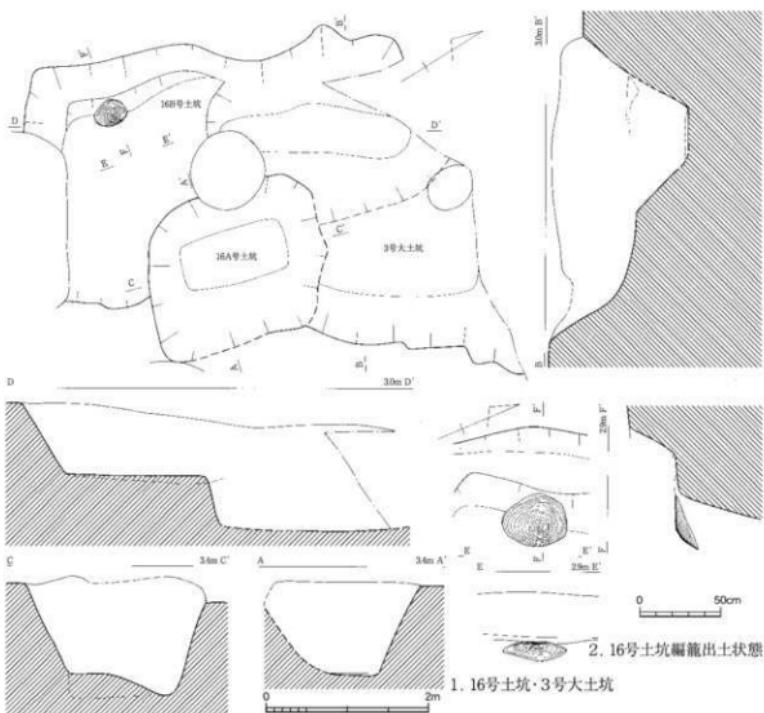
18号土坑（図版5、第6図）

調査区南西部に位置し、17号土坑と2号溝状遺構に切られる。東西軸にテラスを持つ張り出しがあり、南北軸の土坑が主体で、張り出し部は掘り込みのための足場と思われる。南北軸は318cm、東西軸は417cmで、95cm前後の深さがある。中位に粉殻層と炭化物の層がある。

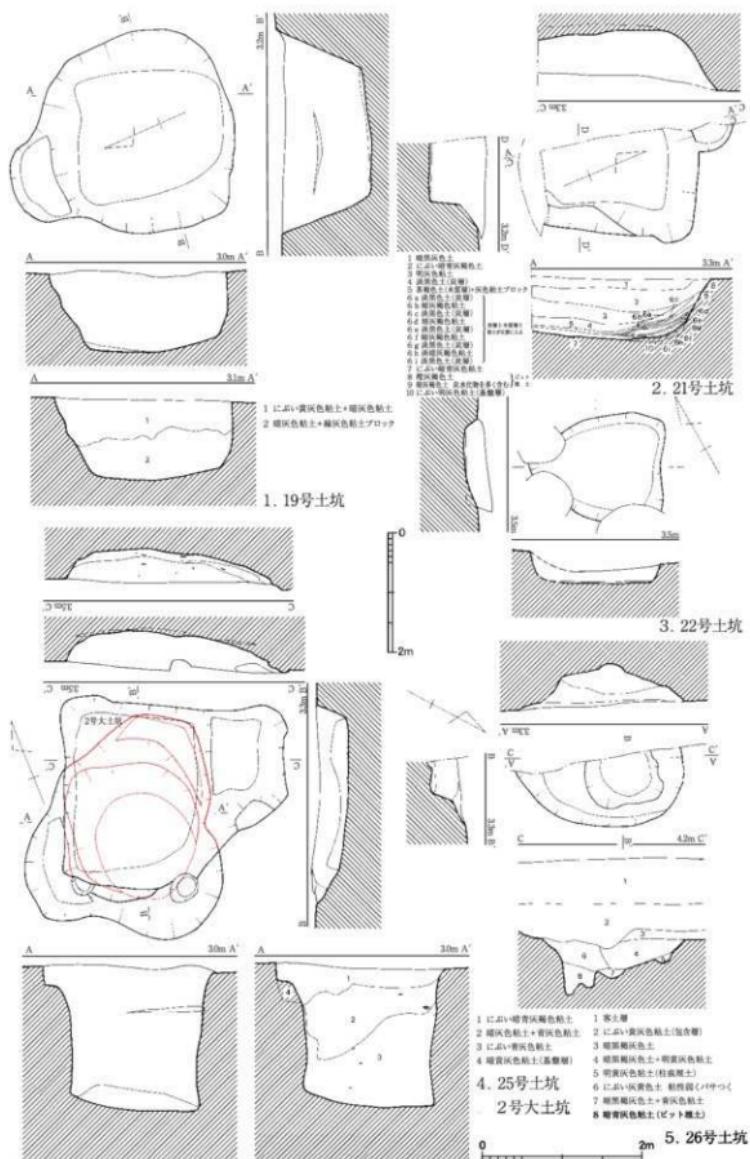
出土遺物が少なく時期を特定しうる遺物が少ないが、家紋文の半球形染付碗があることから18世紀前頭から中葉と考えられる。

19号土坑（図版6、第8図）

調査区南西部に位置し、7号土坑に切られる。北辺に掘り込みのための足場とおもわれる張



第7図 16号土坑・3号大土坑実測図（1は1/60、2は1/30）



第8図 19・21・22・25・26号土坑・2号大土坑実測図 (2・4は1/80、他は1/60)

り出し部があり、長軸は292cm、短軸は253cmで、112cm前後の深さがある。初殻層や炭化物の層はなく、短期間に埋め戻した様相である。

出土遺物が少ないが、端反碗と呉須の吹絵杯があることから19世紀中葉の所産である。

21号土坑（図版6、第8図）

調査区南西端部に位置し、3次調査区の2号土坑と同一遺構である。南側は調査区外に出、西側は8号土坑に切られる。北隅に角がつくことから方形プランになるものと思われ、北側に小さなテラスがつくが、これは掘り込み時の足場か。現存で長軸は260cm、短軸は98cmで、3次調査の2号土坑と合わせると280cm前後になる。110cm前後の深さがある。床面はほぼ平坦で、下位は炭層と木質層が互層をなす。

出土遺物の中に、最大径を口縁にもつ染付碗があり、そのモチーフから18世紀初頭から前葉の所産である。

23号土坑（第5図）

調査区中央西部に位置する方形プランで、長軸は現存で149cm、短軸96cmを測る小型の土坑である。最深部で82cmほどの深さで、壁は緩やかに立ち上がる。6・24号土坑に切られる。

出土遺物が少なく、時期を特定しうる遺物がないが、24号土坑に切られることから18世紀中葉以前であろう。

24号土坑（第5図）

調査区中央西部に位置し、方形プランで、長軸は現存で232cm、短軸164cmを測る、最深部で46cmほどの深さで壁は直に立ち上がる。6号土坑に切られ、23号土坑を切る。

出土遺物に、内面口縁に袈裟襷文帯がある染付碗があり、その花樹文と器形から18世紀中葉であろう。

25号土坑（図版6、第8図）

調査区中央西部に位置し、円形プランで、長軸は現存で201cm、短軸173cmを測る。長軸方向にあるテラスは深く掘るための足場であろう。最深部で250cmほどの深さで、壁は直に立ち上がる。2号大土坑に切られていた。肥前産京焼風陶器碗が多数出土しており、客揃えと考えられる。

出土遺物にコンニャク印判の家紋染付碗は18世紀初頭から前葉で、肥前産陶器窯の口縁部は17世紀後葉の口縁形態であり、打ちハケ目文の皿は古い様相を示すが、多く出土している肥前産京焼風陶器碗は山水文が退化し裏銘がないので18世紀前葉の所産であろう。

26号土坑（図版6、第8図）

調査区東端部に位置し、ほとんどが調査区外に出るため平面プランは不明。41号土坑を切る。床面には切っているピットが検出された。現存で長軸は205cm、短軸は88cm、60cm前後の深さがある。

27号土坑（第9図）

調査区南東端部に位置し、方形プランだが、中央部が深くなる。36・40・43号土坑を切る。現存で長軸は240cm、短軸は182cm、中央部が細長く深くなり57cm前後の深さがある。

出土遺物のうち、菊花文の染付皿の体部が丸みを持つのは17世紀後葉から18世紀初頭の特徴で、器高が低く、最大径が口縁にある小型碗のモチーフと考え併せると、17世紀末から18世紀初頭の所産である。

30号土坑（第9図）

調査区南部に位置し長楕円形プランで、長軸255cm、短軸128cmを測る。深さは70～80cmで、底面は細長い。

口縁部が直立し偏胴の蛸唐草文染付小瓶があることから、18世紀中葉から後葉だろう。

33号土坑（図版8、第9図）

調査区南部に位置し、不整形プランだが、深部は長方形プランで。1号溝状遺構を切り、37号土坑に切られる。現存で長軸は406cm、短軸は374cm、158cm前後の深さがある。上位から中位にかけて多量の陶器が廃棄されており、廃棄遺物群が下位にまで達する。

出土遺物に底銘が角福の碗や、内外網目文で見込みに菊花文に入る染付碗、青磁掛け分け碗の口縁部内面に製婆襷文帯がなく梅樹文が入る特徴は18世紀初頭から中葉の様相を示し、京焼風陶器碗の山水文の退化や裏銘の刻印がないものは18世紀前葉から18世紀後葉と考えられるのが、全面鉄釉施釉の摺り鉢という新しい様相も見られるので、遺構の時期としては18世紀中葉から後葉と推定した。

35号土坑（図版6、第9図）

調査区南東部に位置し、不整形プランで、38・40号土坑を切る。現存で長軸は250cm、短軸は147cm、80cm前後の深さがある。

出土遺物に時期を特定するものがなく、17世紀後半から18世紀代の38号土坑を切るのでそれより新しい。

37号土坑（第10図）

調査区南東端部に位置し、33・40号土坑を切る略長方形プランで、長軸は318cm、短軸は現存で208cmを測る。床面はほぼ平坦でテラス状の足場はない。深さは100cm前後を測る。

出土遺物が少なく、時期は特定できないが、33号土坑を切るので18世紀中葉から後葉以降。

38号土坑（第9図）

調査区南東部に位置し、35号土坑に切られるため平面プランは不明確だが、楕円形か略円形かと思われる。軸の長短は不明だが、現存径で185cmを測る。深さは70cmほどある。

出土遺物が少なく、時期は特定できない。灰色の灰釉のかかる肥前産陶器小皿があるので、17世紀後半から18世紀代である。

39号土坑（第5図）

調査区南東端部に位置し、9号土坑に切られる不整形プランで、長軸は326cm、短軸は現存で218cmを測る。東側の張り出しが略方形プランの土坑が切り合った結果のようにも見えるが、半胸窓の上位は中層に達しており、掘り崩されていないので、1つの土坑と判断した。

出土した口縁内面の崩れた雷文帯と外面に細線の花文をもつ染付碗があること、19世紀前葉から中葉。

40号土坑（第10図）

調査区南部に位置する。27・35・37・38号土坑に切られているため、プランが不明確だが略長方形プランと思われる。現存で長軸は297cm、短軸は180cm、38cm前後の深さがある。

コンニャク印判による桐文の肥前産染付家紋碗や、扁平で受け部が高い肥前産陶器蓋があることから17世紀末から18世紀初頭で、27号土坑が17世紀末から18世紀初頭なので、17世紀末だろう。

41号土坑（図版7、第10図）

調査区南東端部に位置し、ほとんどが調査区外に出るため平面プランは不明。26号土坑に切られる。現存で長軸は356cm、短軸は62cm、50cm前後の深さがある。

時期を特定する遺物なし。

42号土坑（図版7、第6図）

調査区南西部に位置し、検出面では不整形だが、底面は方形を呈する。長軸132cm、短軸120cm、深さ85cmほど深く掘るための足場か。17号土坑に切られるが、18号土坑との切り合い関係は不明。

遺物が少なく時期は特定しにくいが、19世紀前葉の17号土坑に切られる。

43号土坑（図版7、第10図）

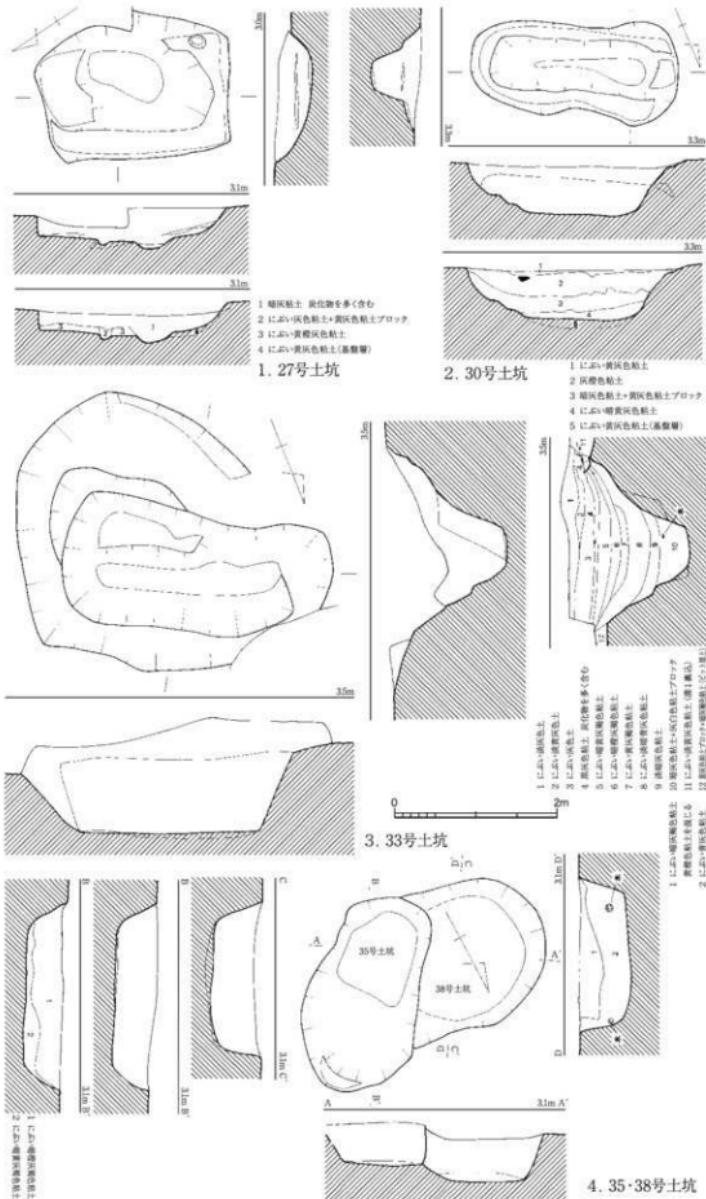
調査区南東端部に位置し、27・36号土坑に切られるため平面プランは不明。現存で長軸は244cm、短軸は275cm、中央部が細長く深くなり70cm前後の深さがある。

外面の草文が胸下位を地面に見立てたモチーフの碗や菊花文を唐草文に散らしたモチーフの染付皿が出土しており、17世紀末から18世紀初頭の27号土坑に切られるので、17世紀後葉から末であろう。

46号土坑（図版9、第10図）

調査区中央南部に位置する不整形プランで、長軸は206cm、短軸は190cmで、深さ153cmを測る。中央に大型の柱が立ち、掘り方を掘り下げる埋設した下部構造が検出された。

中央に立つ大型の柱の上位は、表面が失われて細くなっているが下位はよく残っていた。おそらく上位は地上に露出していたため、風雨にさらされたものと思われ、下部は埋設されていたために、本来の柱の大きさを知ることができる。中位には上部が欠損した貫孔が空いてい



第9図 27・30・33・35・38号土坑実測図 (1/60)

る。これに貫材1が通されている。貫材1は貫孔に通す分だけを面取りして方形に加工して、挿し込みやすくしている。その下に貫材1と十字に交差する方向に貫孔が空いており、そこには貫材2が通されている。そこからやや間隔を開けて、柱下位にも貫孔が空いており、そこには貫材3が貫材1と同じ方向に通されている。

貫材1は、貫材1と垂直方向に置かれた木材に押さえられている。木材は、建築材を再利用した建築材3と、5本の加工のない丸木材であった。また、貫材2は木の幹部分である木1・3の2本とそれよりやや小さい丸木材に押さえられている。貫材3は木2に押さえられている。貫材3と同じ高さに置かれた丸木材は木2の下に入ることから木2の沈み込み防止のためのものと考えられる。

こうした構造は、中心に立つ柱が上下にも左右にも動かないように固定するためのものであり、このことから藩境木と考えられる。

出土遺物がわずかだが、柱の下から口縁部にのみ鉄軸を掛ける肥前産摺鉢の口縁部片が出土しており、内面側にわずかに肥厚することから17世紀中葉から末のものである。

47号土坑（第11図）

調査区中央東部に位置する不整形プランで、55・84号土坑を切る。長軸は223cm、短軸は140cmと小型で、8cm前後の深さしかない。

出土遺物に、白化粧土のハケ目文の肥前産陶器皿や、山水文が崩れていない肥前産京焼風陶器碗があることから、18世紀前葉から中葉である。

48号土坑（図版9、第11図）

調査区北東部に位置し、搅乱溝に切られる。現存で長軸は192cm、短軸は124cmの楕円形の小型で、床面は円形を呈し、最深部40cm前後の深さがある。

出土遺物の球胴で下位に松葉文帯が入る染付瓶は18世紀中葉から19世紀初頭であり、扁平で受け部が高い肥前産陶器蓋など古い様相のものも含まれることから18世紀中葉であろう。

49号土坑（図版7、第11図）

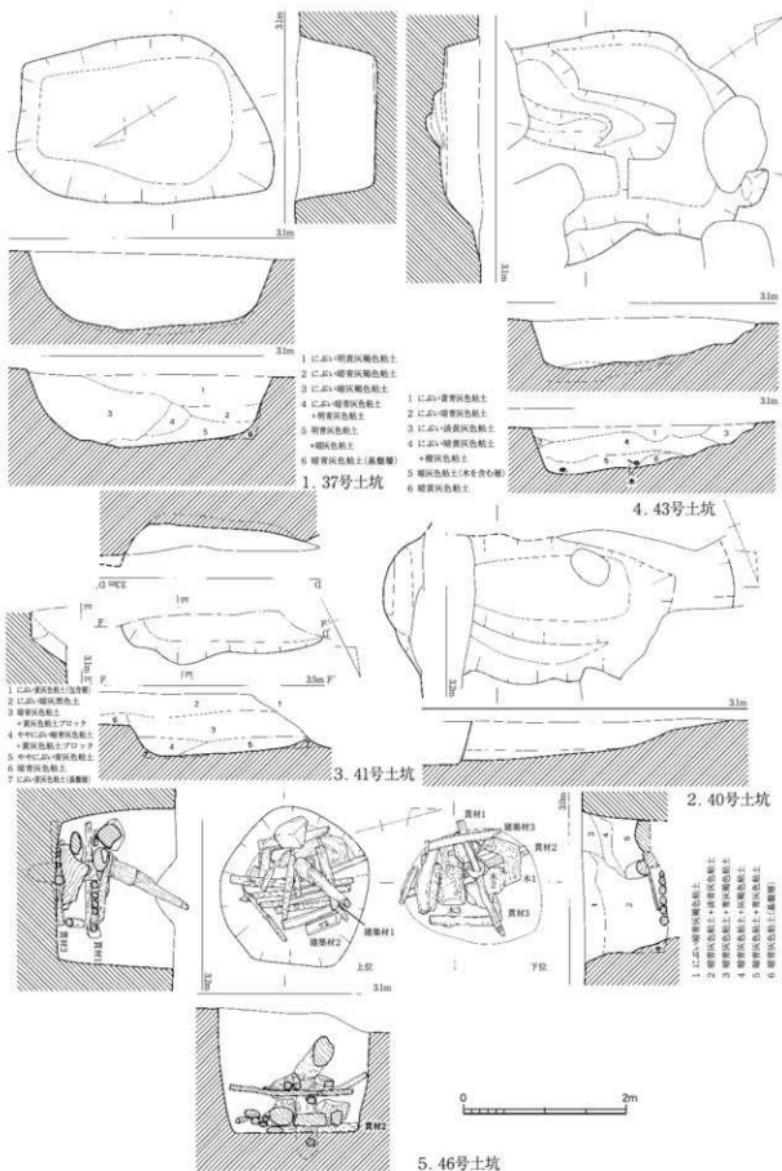
調査区北東部に位置し、搅乱溝に切られる。現存で長軸は192cm、短軸は124cmの楕円形の小型で、最深部は円形で40cm前後の深さがある。

出土遺物に、内外に網目文、見込みに菊花文、裏銘に角福が入る染付碗と、外面の唐草文のモチーフが退化した染付皿であることから、遺構の時期は18世紀前葉から中葉と考えられる。

50号土坑（図版10、第11図）

調査区北東端部に位置し、略長方形プランで、70・71号土坑を切る。長軸は227cm、短軸は120cm、55cm前後の深さがある。

出土遺物の雨降文染付碗はモチーフの崩れが少ないとから18世紀前葉から中葉であり、本遺構もこの時期の所産であろう。



第10図 37・40・41・43・46号土坑実測図 (1/60)

51号土坑（図版10、第11図）

調査区東部に位置し、略方形プランで、52号土坑に切られ、80号土坑を切る。長軸は現存で120cm、短軸は184cm、50cm前後の深さがある。土層から、箱形の空間があった可能性があるが、木質などの痕跡はなかった。

出土遺物が少なく、時期の特定が困難だが、三川内産の打ち刷毛目小碗があることから17世紀末から18世紀前葉と考えられる。

53号土坑（図版12図）

調査区中央部に位置し、不整形プランで、55・61号土坑に切られる。長軸は274cm、短軸は260cm、60cm前後の深さがある。中央部が円形で摺鉢状に広がる。

出土遺物に、やや腰の張る染付碗や、広東碗のように高台が高く体部に丸みのある染付碗があり新しい様相に見えるが、55号土坑が18世紀初頭から前葉なので、それに切られるのでそれ以前の時期である。

54号土坑（図版10、第12図）

調査区中央部に位置し、略方形プランで、55号土坑に切られる。現存で長軸は182cm、短軸は120cm、35cm前後の深さがある。床面はほぼ平坦であった。

出土遺物に三川内産のホタル手陶器皿があり、染付皿のモチーフの崩れからが見られることから、17世紀後葉から18世紀前葉の所産だろう。

55号土坑（第11図）

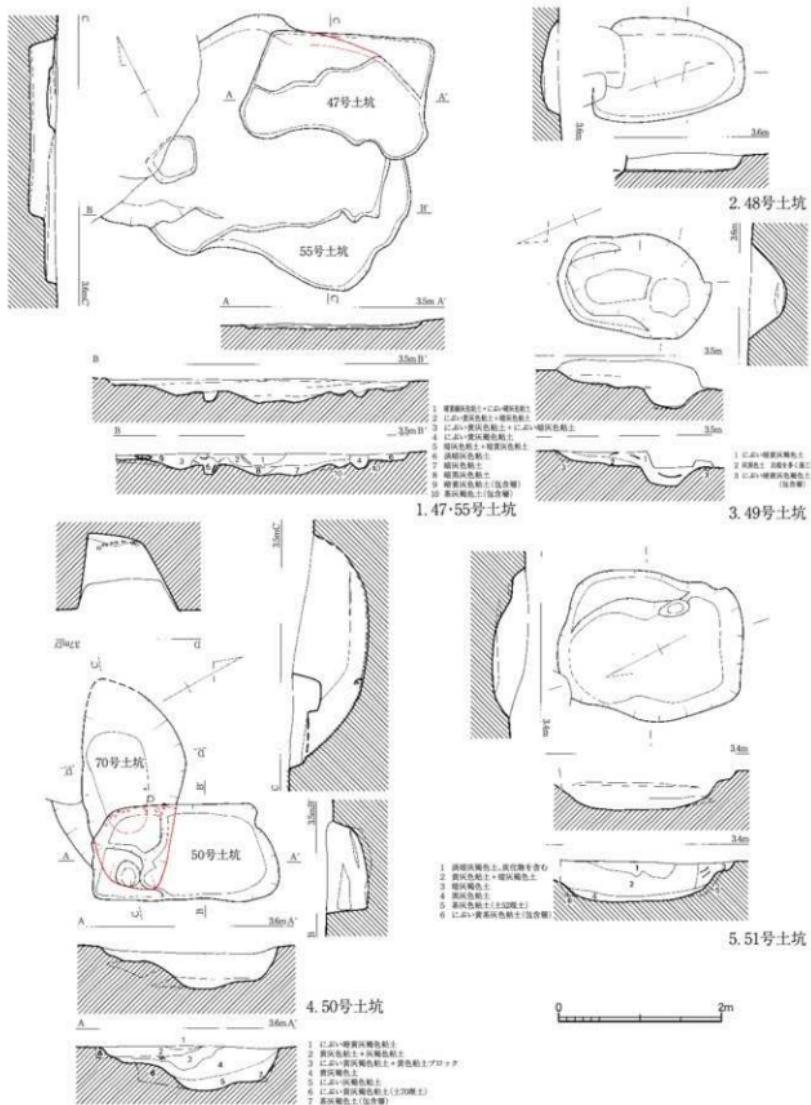
調査区中央東部に位置する不整形プランで、47号土坑に切られ、53・54・84号土坑を切る。長軸は現存で355cm、短軸は300cmと大型だが30cm前後の深さしかない。

出土遺物に、内面にコンニャク印判で施された菊花文が入る染付皿は18世紀初頭から中葉のもので、内面に松樹文、見込みにコンニャク印判の5弁花文が入る染付皿は、外面の唐草文の崩れ方から見て18世紀初頭から前葉の所産である。これらの遺物が入り、17世紀後葉から18世紀前葉の54号土坑を切り、18世紀前葉から中葉の47号土坑に切られるので、遺構の時期は18世紀前葉と考えられる。

56号土坑（図版10、第12図）

調査区中央東部に位置する長方形プランで、47号土坑に切られ、53・54号土坑を切る。壁が直に立ち上がる。墓坑のようだが示す遺物や土層状況はない。長軸は現存で256cm、短軸は94cmと大型だが50cm前後の深さである。

出土遺物に、口縁が屈曲した後、屈曲部が内湾する肥前産陶器皿があり、かつ、18世紀前葉から中葉の47号土坑に切られ、17世紀後葉から18世紀前葉の54号土坑を切ることから、18世紀前葉のものと考えられる。



第11図 47～51・55号土坑実測図 (1/60)

57号土坑（図版10、第12図）

調査区中央西部に位置する方形プランで、58・64号土坑、4号溝状遺構を切る。壁が直に立ち上がる。長軸は現存で308cm、短軸は228cmと大型で、床面は長方形を呈する。140cm前後の深さである。

出土遺物に裏銘が角福の肥前産染付皿と、高台内に刻印のない肥前産京焼風陶器碗があることから、18世紀前葉から中葉の土坑である。

58号土坑（図版10、第12図）

調査区中央西部に位置する細長い長方形プランで、57号土坑に切られ、64号土坑、4号溝状遺構を切る。壁が直に立ち上がる。長軸は現存で240cm、短軸は現存で86cm、床面は長方形を呈する。116cm前後の深さである。埋土は植物質を多く含む茶褐色土であった。

出土遺物に内面にコンニャク印判の菊花文が入る染付皿があることと、57号土坑に切られることから、本遺構は18世紀前葉の所産であろう。

60号土坑（図版11、第12図）

調査区北東部に位置する細長い長方形プランで、62号土坑に切られる。壁が直に立ち上がる。長軸は現存で392m、短軸は現存で80cmで、35cm前後の深さしかない。

出土した染付瓶の胴部が細く、口縁部が外反し、胴下位に界線があり、胴部の雪ノ輪文のモチーフから18世紀中葉から後葉のものと考えられるので、本遺構はこの時期であろう。

61号土坑（図版11、第13図）

調査区中央部に位置する細長い長方形プランで、上位は緩やかに広がっていたので、これを掘り下げて検出された。53号土坑との切り合い関係は検出時には不鮮明だったが、土層から切られているとわかった。長軸305cm、短軸81cmだが、上位には立ち上がりの緩やかな広がりがあった。深さ57cm前後で、木質層の互層がある。

出土遺物の中に、ややモチーフが崩れた雨降り文や雪ノ輪文の染付碗、コンニャク印判の桐文を染め付けた猪口などがあることから、遺構の時期は18世紀前葉と考えられる。

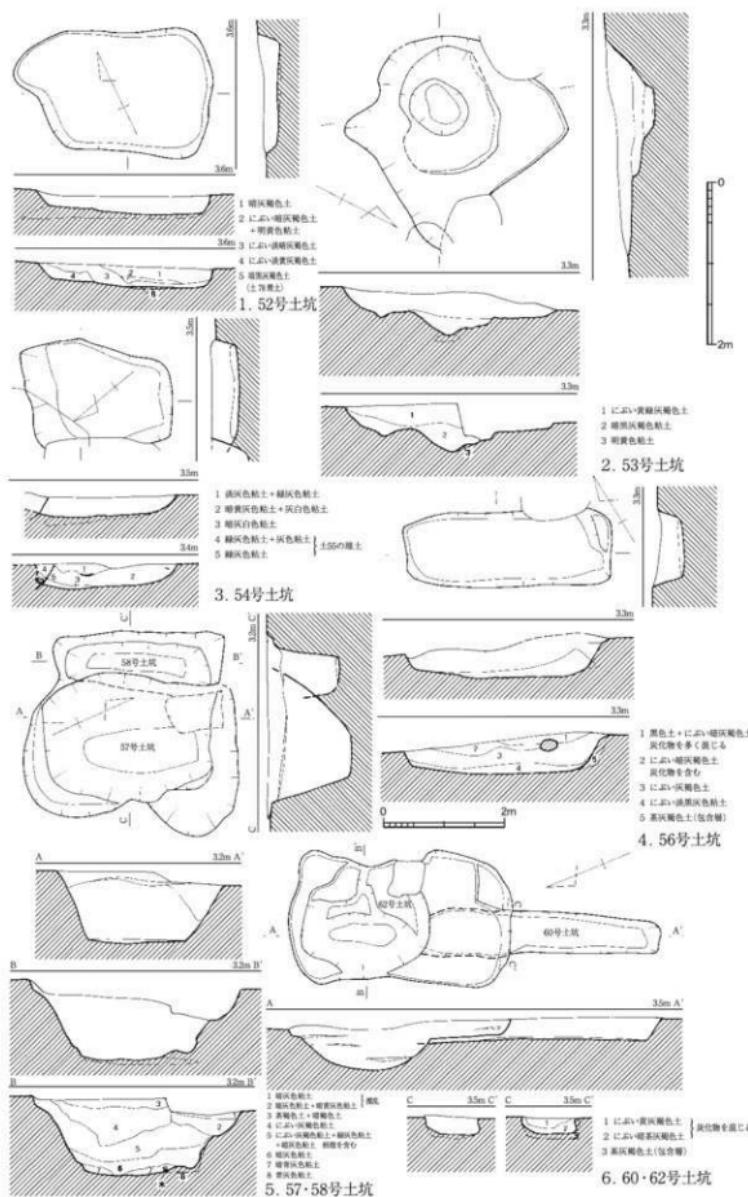
62号土坑（図版11、第12図）

調査区北東部に位置する方形プランで、60号土坑を切り、4号溝状遺構を切る。長軸は362m、短軸は218cm、中央部の細長い窪みは60号土坑の延長上に位置するので、60号土坑にあたる可能性がある。85cm前後の深さがある。方形の柱根が遺存するピット111に切られる。

時期を特定できる出土遺物はないが、18世紀中葉から後葉の60号土坑を切るので、それ以降といえる。

63号土坑（図版11、第13図）

調査区西端中央部に位置する長方形プランで、64号土坑が埋没した上に作られており、明瞭に検出された。長軸212cm前後、短軸106cm前後だが、深さ45cm前後しかない。



第 12 図 53・54・56～58・60・62 号土坑実測図 (5 は 1/80、他は 1/60)

小型で、時期の特定できる出土遺物がないが、17世紀末から18世紀初頭の64号土坑を切るので、それ以降である。

64号土坑（図版12、第14図）

調査区中央西部に置し、検出時には北部が大きく搅乱を受けたため、プランが正確に分からず²、この大きさであれば大土坑とするべきだが、土坑とした。略方形プランで、4 A・4 B・5号大土坑に西辺を切られ、57・58・63号土坑にも切られる。

北辺の壁際と中央部のテラスの壁に竹列と杭列と横木があり、北西隅は弧状の杭列がある。この竹・杭列と横木は壁の土留め構造である。長軸910cm前後、短軸710cm前後を測る大型土坑である。

出土遺物のうち、口縁部外面を折り曲げて肥厚させ、内面に段がある肥前産摺鉢は17世紀中葉から17世紀末で、芙蓉手の染付皿の花文のモチーフが退化していることや、内面の網目文にコンニャク印判の菊花文が入る染付碗があるので、本遺構は17世紀末から18世紀初頭。

66号土坑（図版13、第15図）

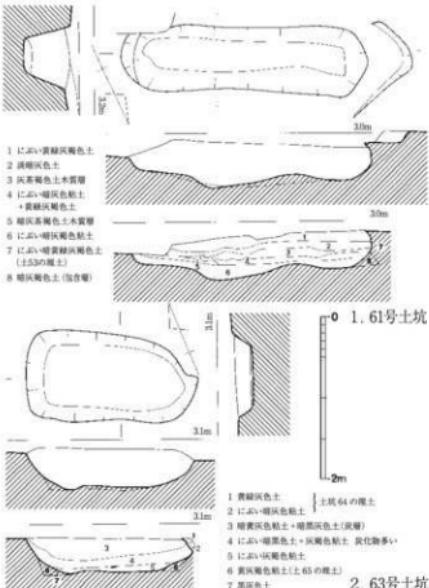
調査区中央部に位置する不整形プランで、長軸208cm前後、短軸128cm前後だが、北側の落ち込みは略方形を呈する。深さ35cm前後しかない。

遺構の時期は、裏銘が渦巻で崩れた扇文の染付皿と、口縁部がほぼ直立する身の深い染付皿があることから18世紀前葉。

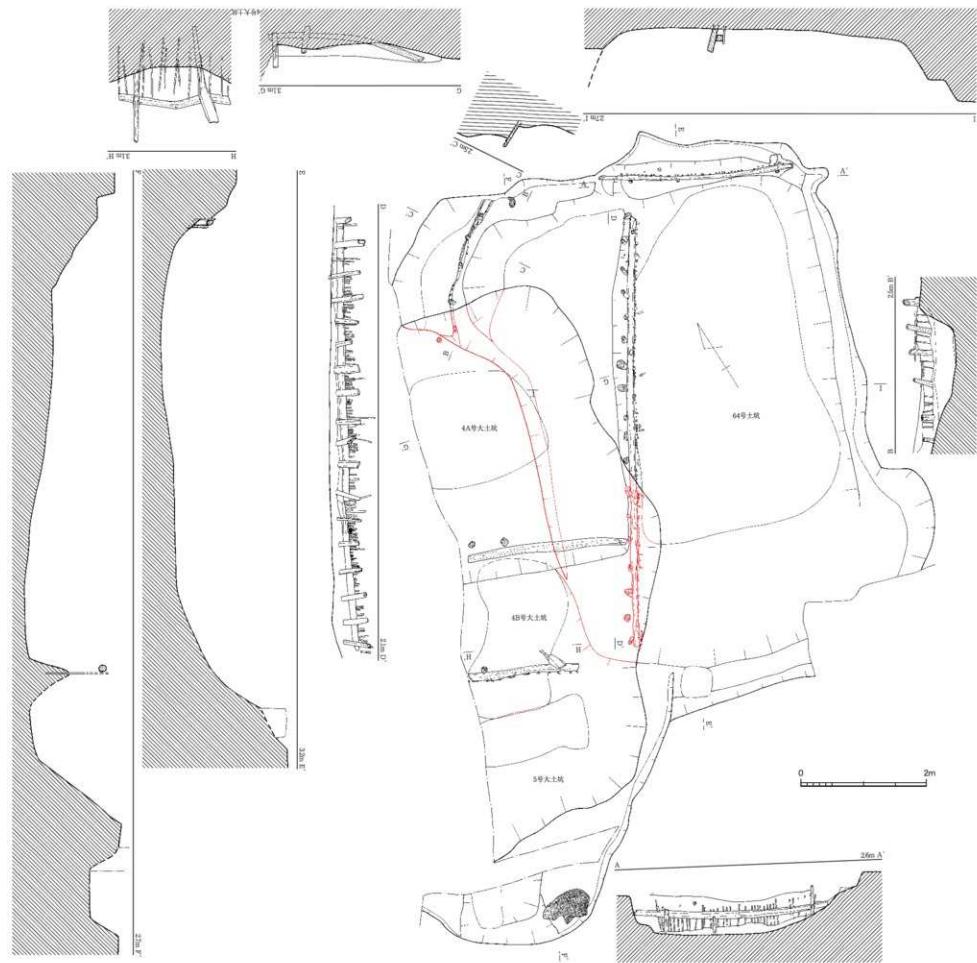
67号土坑（図版13、第15図）

調査区北部に位置する不整形プランで、北側の上位は掘り直しを受けている。長軸292cm前後、短軸85cm前後だが、北側の落ち込みは略方形を呈する。深さ118cm前後あるが、土層から見ると、一挙に埋め戻されている。

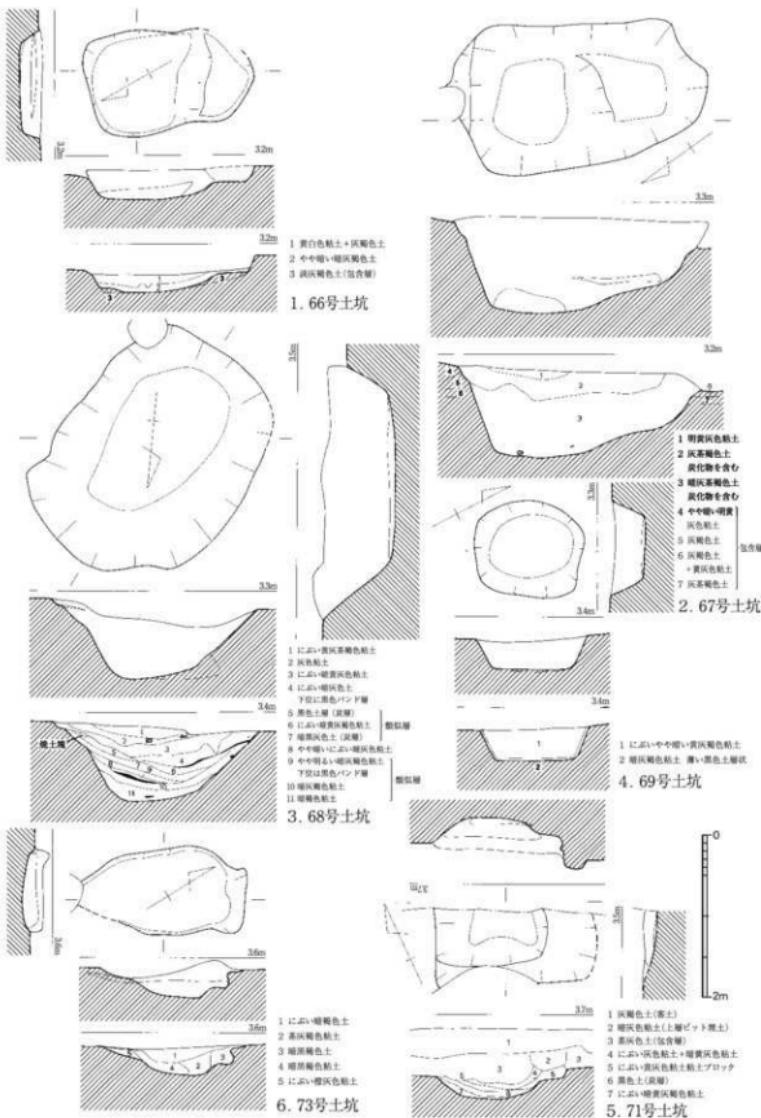
出土遺物に、内面口縁部に裂縫櫻文帯のある筒形碗や、花唐草文や崩れの小さい雨降文碗など古い様相もあるが、寿文碗もあるので18世紀後葉から末だろう。



第13図 61・63号土坑実測図(1/60)



第14图 64号土坑、4·5号大土坑实测图(1/60)

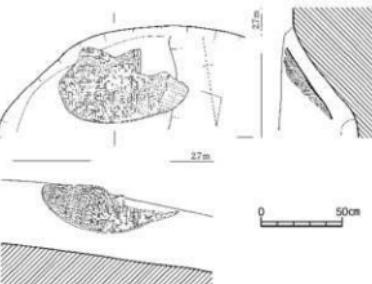


第15図 66～69・71号土坑実測図 (1/60)

68号土坑（図版13、第15図）

調査区北部に位置する不整形プランで、北側の上位は掘り直しを受けている。長軸310cm前後、短軸263cm前後を測る大型土坑で、床面はほぼ平坦。深さ80cm前後あるが、土層から見ると、上位に掘り直しがある。炭層が3つあり、長期間廃棄土坑として使用されたことがわかる。

出土遺物に腰張形碗があることから、18世紀後葉から19世紀初頭。



第16図 5号大土坑出土状態実測図（1/30）

69号土坑（図版13、第15図）

調査区北部に位置する小型の略円形プランで、長軸133cm前後、短軸115cm前後で、床面はほぼ平坦である。深さ45cm前後あるが、土層から見ると、床面に炭層があり、一挙に廃棄されている。70号土坑を切る。

出土遺物は少なく、肩に耳が付き、口縁部が大きく外反する甕があるので、17世紀後半代。

71号土坑（図版14、第15図）

調査区北端部に位置し、ほとんどが調査区外に出る。方形プランで、埋土が基盤層に近かつたため東端は掘りすぎた。50号土坑に切られる。長軸は160cm、短軸は現存で70cm、現存で45cm前後の深さがある。

出土遺物に、口縁部の立ち上がり角度の大きい網目文皿は18世紀中葉から19世紀初頭のもので、外面竹箇文で裏銘に角福の染付碗であることから、18世紀中葉であろう。

73号土坑（図版14、第15図）

調査区北東端部に位置し、不整形プランで、長軸は205cm、短軸は110cm、35cm前後の深さがある。立ち上がりが緩やかで、土層から掘り直しがある。

外面に菊花文と唐草文の崩れたモチーフの染付碗であることから18世紀中葉である。

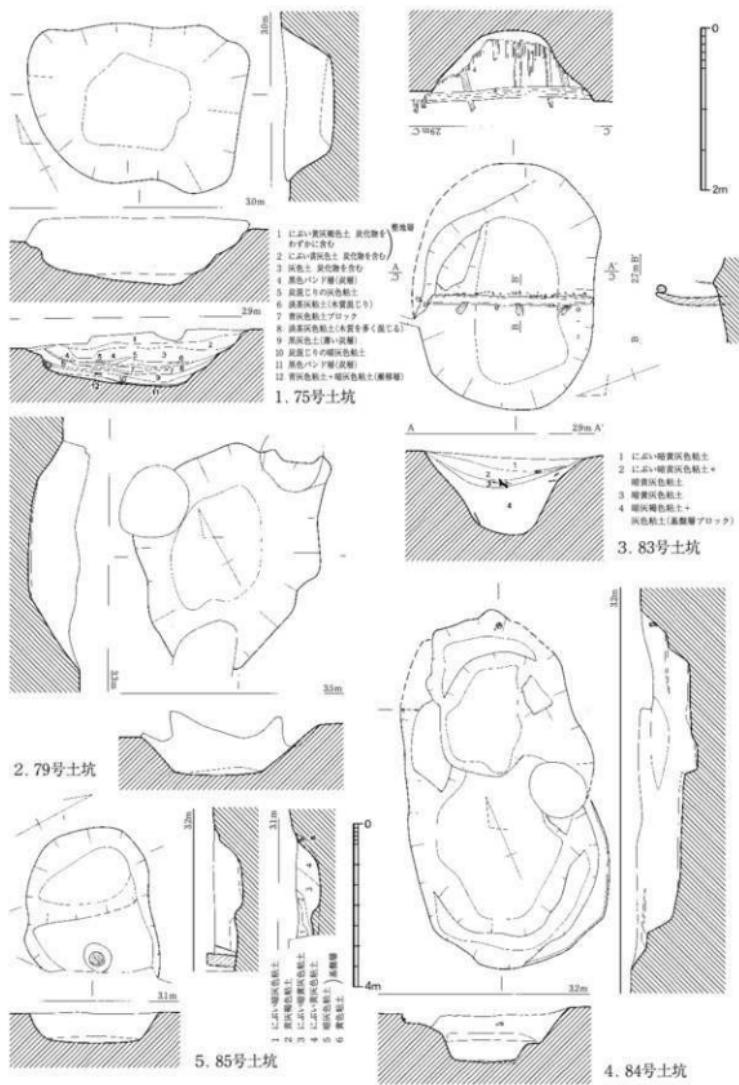
75号土坑（図版14、第17図）

調査区中央部に位置する方形プランで、長軸272、短軸195cmだが、立ち上がりの緩やかな広がりがあった。深さ85cm前後で、炭層と木質層の互層があり、長期間の使用が想定される。6号溝状遺構に切られる。

染付皿の側面の唐草文に崩れがなく、裏銘の大明年製の崩れも少ないとから、18世紀中葉から後葉。

79号土坑（図版14、第17図）

調査区中央部に位置する不整形プランで54号土坑に切られる。長軸278cm、短軸228cm、深さ75cm前後を測る。



第17図 75・79・83～85号土坑実測図 (4は1/120、他は1/60)

出土遺物の口縁部が斜めに立ち上がる網目文小皿は18世紀中葉から19世紀初頭のもので、京焼風陶器の山水文モチーフが崩れていないものがあることから、18世紀中葉から後葉。

83号土坑（図版15、第17図）

調査区北端部に位置し、72号土坑に切られるため東部が失われているが、本来は略方形プランと考えられる。長軸は303cm、短軸は217cm、120cm前後の深さがある。立ち上がりが急で、中位まで一挙に埋没している。杭が土坑中央に土留めの木組があり、南北に横断して杭列と竹柵が併走しており、その間に横木がある。他の土留め遺構と同じ構造であることから、木組の西側が裏込めであったと思われる。横木の北端部は欠損しているためわからないが、南端部は半分カットして壁の傾きに合わせていた。竹柵が欠損して横木に達していなかったため、掘り下げると横木が保持できず、足場板で保持して撮影した。時期を特定できる遺物なし。

84号土坑（第17図）

調査区中央東端部に位置し、埋土に混入物は少なく、基盤層に近い粘土で、上位は整地されていたため検出は困難だったが、2つの土坑から成る47・55号土坑と12から14号カマドは本土坑埋没後に作られている。不整形プランと考えられる。長軸は880cm、短軸は470cm、150cm前後の深さがある大型の土坑である。西側には掘り方が広がっていたものと思われるが、検出が困難であったため、掘り下げたので掘り方は小さくなつた。

出土遺物はそれほど多くはないが、古い要素の鳳凰文の入る鉢や、口縁内面に肥厚する擂鉢から17世紀中葉から末。口縁部に界線が入る染付碗は17世紀中葉から後葉なので、本遺構は17世紀中葉から後葉の所産だろう。このほか大型のフイゴの羽口などが出土している。

85号土坑（第17図）

調査区北東端部に位置し、東側の調査区外に出る。4号溝状遺構を切る略方形プランと考えられる。長軸は現存で180cm、短軸は155cm前後、40cm前後の深さがある。

時期を特定できる出土遺物はない。

86号土坑（図版15、第18図）

調査区北部に位置し、隅丸方形プランで、長軸は183cm、短軸は136cm、45cm前後の深さの小型土坑である。時期を特定できる出土遺物はない。

87号土坑（図版15、第18図）

調査区北部に位置し、略方形プランで、東側にテラスがあり、最深部は正方形。長軸は現存で265cm、短軸は200cm前後、80cm前後の深さがある。中位に炭・灰の層と木質層あり。

出土した京焼風陶器の碗の高台内に刻印と円があることから、18世紀初頭から18世紀前葉。

88号土坑（図版15、第18図）

調査区北部に位置し、不整形プランで摺鉢状を呈する。長軸は現存で313cm、短軸は305cm

前後、165cm前後の深さがある。2号焼土坑の下から検出された。上位は炭層や貝殻・初殻の入る薄い層が入る。

染付の蛸唐草文のモチーフから18世紀中葉から後葉。

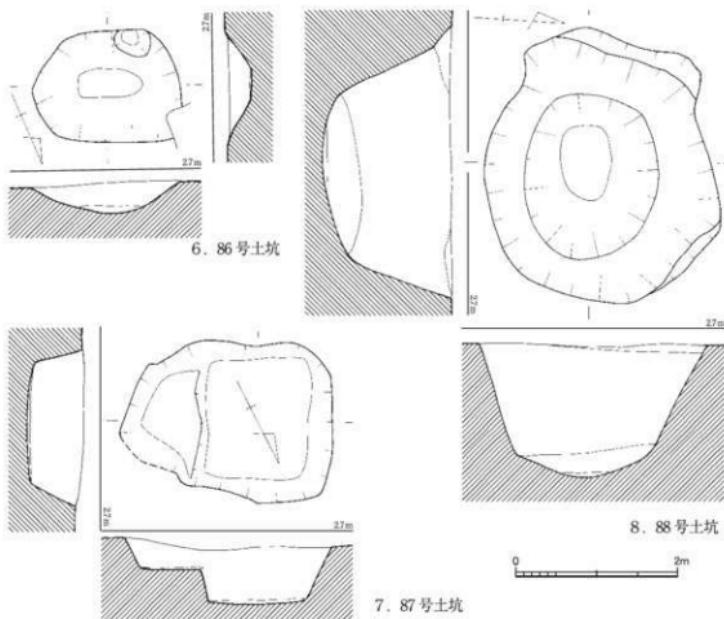
89号土坑（図版15、第19図）

調査区北西部に位置し、長方形プランで、6号大土坑を切る。長軸は現存で638cm、短軸は454cm前後、70cm前後の深さがある。2次調査の5号土坑と同一遺構である。

出土遺物には半球染付碗が多く、肥前産京焼風陶器碗の高台内は刻印がないことから、本遺構は18世紀前葉から中葉である。

90号土坑（第19図）

調査区北部に位置し、不整形プランで、52号土坑・6号大土坑を切る。長軸は現存で400cm、短軸は250cm前後で、115cm前後の深さがある。東辺に掘り込みの際の足場と見られるテラスがある。床面は長方形プランなので、上位のプランは削平を受けたため。大明年製の裏銘が崩れが少なく、口縁部が受け部状に屈曲している染付皿があることから17世紀後葉から18世紀初頭。本遺構を切っている52号土坑は18世紀初頭から前葉なので、18世紀初頭。



第18図 86～88号土坑実測図 (1/60)

91号土坑（図版15、第18図）

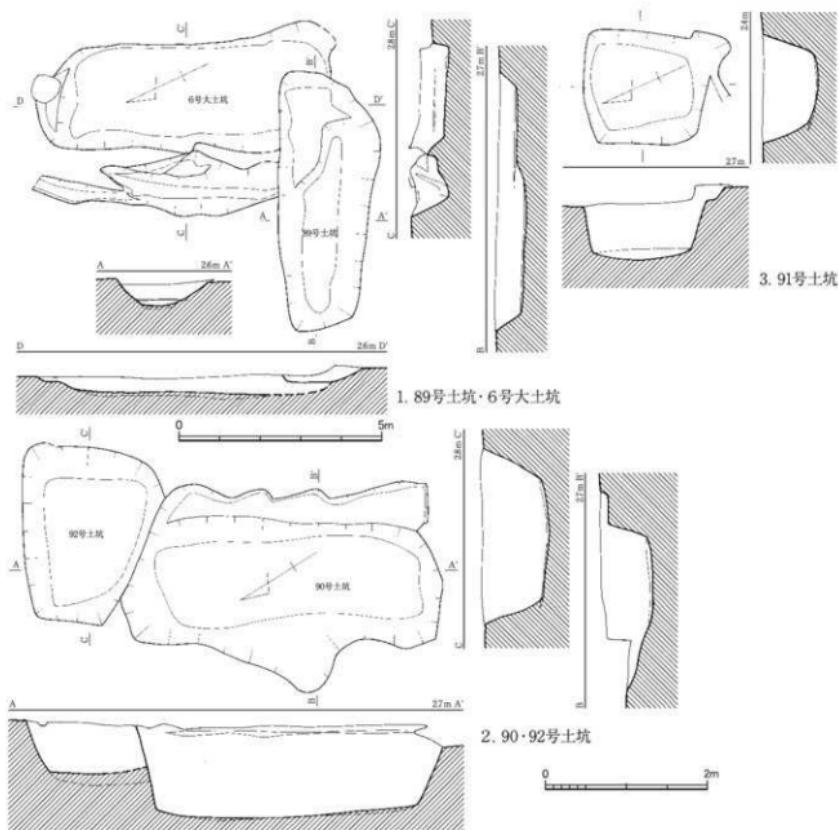
調査区中央北部に位置し、正方形プランで1辺145cm、70cm前後の深さがある。当初井戸とを考えていたが浅く小型なので、土坑とした。

肥前産京焼風陶器の碗で、灰釉も見込みの鉄絵も焼成良好で裏に刻印があるので、本遺構は18世紀中葉から後葉である。

92号土坑（図版15、第19図）

調査区中央北部に位置し、6号大土坑に切られているため方形プランの1角がのみが検出されたもので、規模はわからない。深さは70cm前後を測る。

出土遺物はなく、時期は6号大土坑が18世紀初頭以前であるから、それ以前だろう。



第19図 89～92号土坑・6号大土坑実測図（1は1/120、他は1/60）

2号大土坑（図版16、第8図）

調査区中央西部に位置し東側に張り出し部がつく。長軸は188cm、短軸174cmを測る、最深部で57cmほどの深さで壁は緩やかに立ち上がる。25号土坑を切る。

吹き絵の杯や崩れた千鳥波濤文に呉須の口銷のある染付皿、端反染付碗があることから、本遺構は19世紀中葉である。

3号大土坑（第7図）

調査区中央西部に位置し、1・16・22号土坑に切られるためと、北辺は調査区反転時の調査区境にかかるため、プランは不明確だが、最深部の東辺は直線的なので方形プランの可能性が高い。現存で長軸は130cm、短軸110cmを測る、最深部で130cmほどで壁は急に立ち上がる。出土遺物が少なく、時期が特定しにくいが、18世紀中葉の16号土坑に切られるので、18世紀中葉以前。

4号大土坑（図版12・16、第14図）

調査区中央西部に位置し、南辺に杭と横木の木組遺構があり、さらにもう一つの杭と横木があることから、これをA・Bとして2つに分けた。連続して掘ったため切り合は不明だが、4A号は3次調査2号大土坑、4B号は3次調査3号大土坑の新段階と同遺構なので、4A号が新しいとわかる。完形の鎌が出土した。水漬けしていたものか。64号土坑・5号大土坑を切る。

4A号は口縁部外が肥厚する摺鉢から18世紀中葉以降、銅線碗もあるので18世紀中から後葉であろう。4B号は口縁部内面が肥厚する摺鉢で口縁部のみに鉄軸が施されるものは17世紀中葉から末のもので、京焼風陶器碗の裏銘があることから17世紀末から18世紀初頭。

出土遺物が少ないが、4B号大土坑に切られ、64号土坑を切ることから、18世紀初頭。

5号大土坑（図版12・16、第14・16図）

調査区中央西部に位置し、北辺の4B号大土坑の杭と横木があり、それから南を本遺構とした。3次調査の3号大土坑の古段階のものと同一遺構。南端の上位で斧が出土した。裏込め土はここまで。完全な形ではなく杵の半分ほどが遺存していたが、整理中に崩壊した。鎌の柄を杭として挿している。

時期は出土遺物が少なく、時期を特定しにくいが、90号土坑に切られるので18世紀初頭以前である。

6号大土坑（図版16、第19図）

調査区北西部に位置し、90号土坑に切られ、92号土坑を切るためと、北辺は調査区反転時の調査区境にかかるため、プランは不明確だが方形プランで、現存で長軸は130cm、短軸110cmを測る、最深部で130cmほどの深さで壁は急に立ち上がる。3次調査の7号溝状遺構との切り合は不明。

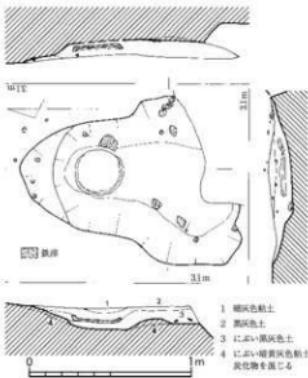
b) 焼土坑

当初、2基の焼土坑を検出しているが、1号焼土坑は炉跡状だが、床面の焼けが弱く、焼土を廃棄した可能性があるので、焼土坑として掲載しないことにした。

2号焼土坑（図版17、第20図）

土坑は床面が緩やかに立ち上がっており、ほぼ全面が焼けている。また、床面から鉄滓が出土しているが径3cm程の小さなものが約20個程であり、廃棄したというよりは片付けた残りという状態であった。最下層には炭化物も混じる。床面の一部が焼けているが、火床などの焼け方ではなく炉ではなかった。土質質窓の底部が出土しているが、廃棄されたものである。88号土坑は本遺構の下から検出された。

出土遺物がほとんどないため時期を特定しにくいが、検出面が高く近代の可能性もある。



第20図 2号焼土坑実測図 (1/30)

c) カマド

1から7号カマドは調査区南東部に集中して検出された。1から4号は北東部に、5から7号は北西方向に焚口を持つ。遺構の切り合いから、北西部に焚口を持つグループはカマド4→カマド3→カマド2の順で、西部に焚口を持つグループはカマド5→カマド6→カマド7の順であった。土層から北西に焚口を持つグループが新しいとわかる。出土遺物がなく、時期不明だが、39号遺構の埋没した上に作られており、19世紀前葉～中葉以降である。

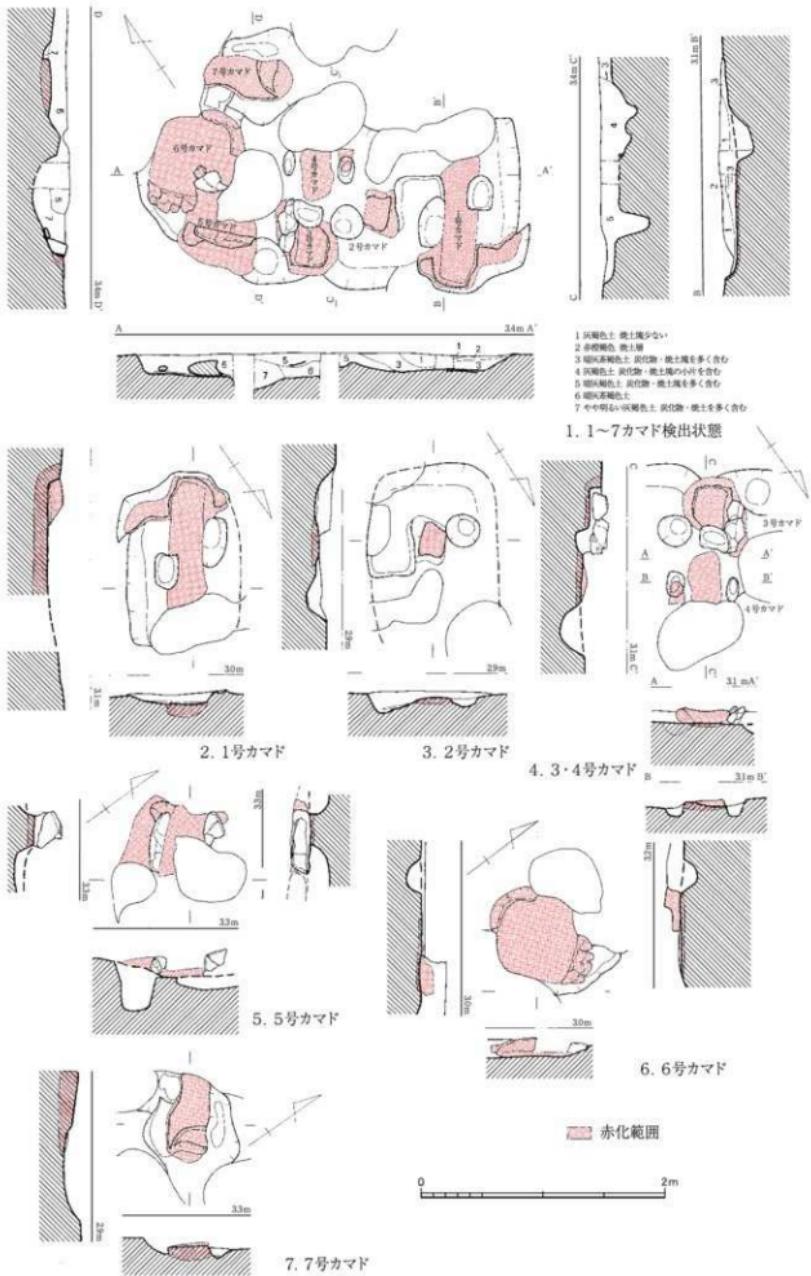
8から11号カマドは調査区東部端に集中している。出土遺物がなく、時期不明。12から14号カマドは調査区中央東部に集中しており、84号土坑が埋没した後に作られている。そのため、17世紀中葉から後葉以降である。15・16号カマドは調査区北西部に位置しており、併列状態で検出された。上面は灰色土が被っており、上面は整地面に覆われていた。18世紀後葉の76号土坑に切られているので、それ以前だろう。

1号カマド（図版17、第21図）

隅丸方形プランで、中央部突出部をもつ。北側に焚口があったようだがピットに切られている。左右の石は抜かれている。南部は火床がよく残っていた。2号カマドとは平行に存在しているので併設かもしれない。

2号カマド（図版17、第21図）

周囲をピットに切られており、プランはほとんどわからない。北側に焚口があったようだが失われており不明である。火床も残りが悪く、一部しか残っていない。左右の石は抜かれている。南部は火床がよく残っていた。



第21図 1~7号カマド実測図 (1/40)

3号カマド（図版17・18、第21図）

周囲をピットや4号カマドに切られており、プランはほとんどわからない。西側の側石は残っており、北側に焚口があったようだが4号カマドに切られているためわからない。

4号カマド（図版17・18、第21図）

周囲をピットに切られており、南側は3号カマドがあるためプランがわからなかった。左右両側の側石は失われており、抜き取った痕跡のみ残る。北側に焚口があったようだがピットに切られている。

5号カマド（図版17・18、第21図）

左右両側の側石が残っているが、プランはわからなかった。周囲をピットに切られており、6号カマドを切っている。3号カマドの側石が残っているので西側に焚口があったようだ。左右両側の側石が残っているので、最も新しいのではないか。

6号カマド（図版18、第21図）

略円形プランで、ピットと36号土坑に切られているが、残った部分に粘土の炉壁が残る。5号カマドに切られる。6号カマドの北側の炉壁が残っているので、7号カマドを切る。

7号カマド（図版18、第21図）

周囲をピットに切られており、プランはわからなかった。左右両側の側石は失われている。火床西側のも36号土坑に切られている。6号カマドの北炉壁が残っているので6号カマドに切られている。

8号カマド（図版18、第22図）

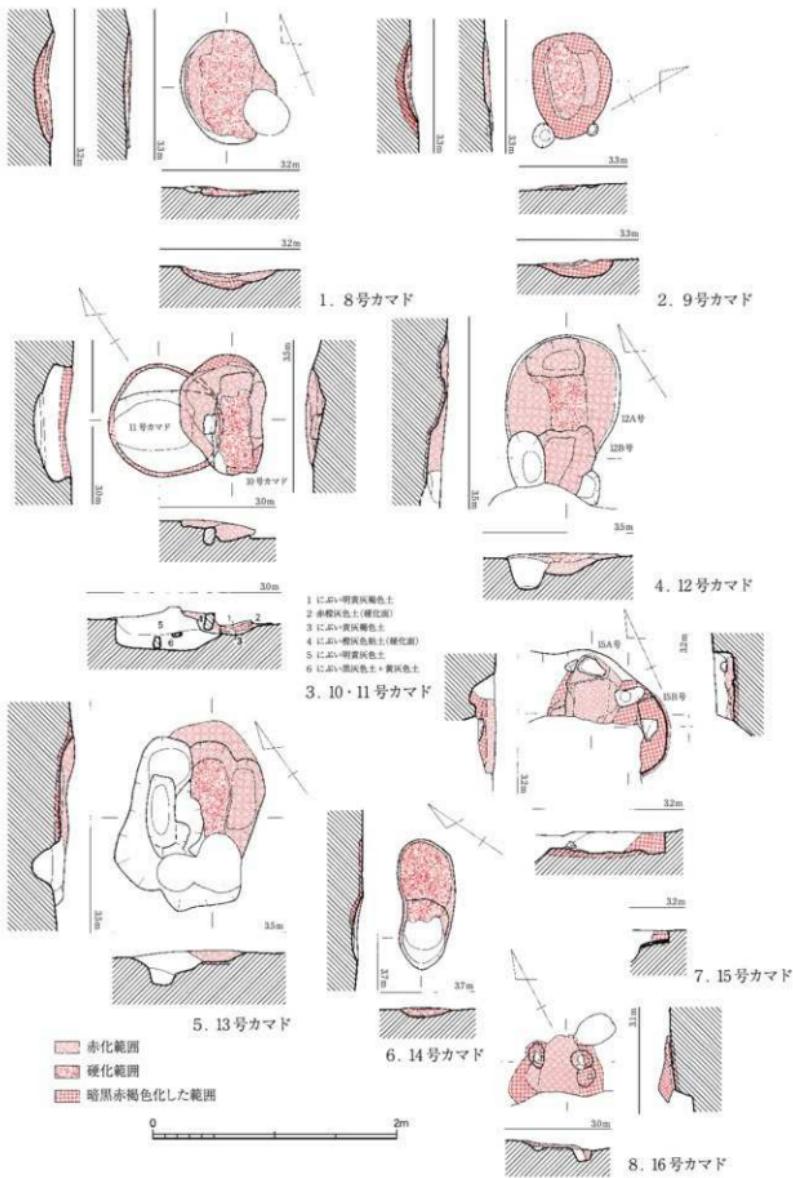
楕円形プランで、中央に長方形に硬化面があることから、左右に側石を置いたと考えられる。石の抜き穴はなかったが、硬化面の左右が赤変し、西側に暗黒赤褐色化した部分があった。炉壁や側石は残っておらず、埋没土内にも入っていないかった。火床面は北側に上がっていることから、焚き口は北側である。4号溝状遺構が完全に埋没した後に作られている。

9号カマド（図版18、第22図）

楕円形プランで、中央に楕円形に硬化面があることから、左右に側石を置くものであったと考えられる。石の抜き穴はなかったが、硬化面の北側が赤変している。炉壁や側石は残っておらず、埋没土内にも入っていないかった。火床面は東側が急に立ち上がっていることから、焚き口は西側である。東側に小ピットがあるが、焚口の対面にあることから、煙突に関わるものかもしれない。

10号カマド（図版19、第22図）

楕円形プランで、中央に長方形の硬化面があり、その西側には側石が残っており、粘土で



第22図 8～16号カマド実測図 (1/40)

固定されていた。東側には石の抜き穴があるが、抜き穴は北に長いことから、西側の側石も本来は北側に長かったと考えられる。また、側石の位置から、焚口は北側にであろう。

11号カマド（図版19、第22図）

楕円形プランで、10号カマドに切られている。床面は焼けておらず、硬化面もない。側縁に暗黒赤褐色化しているの内部で火を使っていたことは明らかである。

12号カマド（図版19、第22図）

14号カマドの下から検出され、当初1基と考えていたが、整理段階で2基と考えてA・Bに分けた。Aは楕円形プランで、中央に長方形に硬化面がある。硬化面の左右に石の抜き穴はないが、北側に抜き穴がある。Bは左右の石の抜き穴があり、赤化した範囲が北に広がっているので、焚口は北側にあったものと考えられる。Aの硬化面がBの上に被っているので、後者が新しい。

13号カマド（図版19、第22図）

楕円形プランで、南西部を12A号カマドに切られている。長方形の硬化面が残っており、これに対する南東側の側石の抜き穴がある。南西側は赤化していない部分があるので、南西が焚口と考えられる。

14号カマド（図版19、第22図）

楕円形プランで、硬化面だけが残っており、石の抜き穴もない。硬化面を外すと下から12号カマドが検出された。南西側に赤化していない部分があるので、南西部が焚口であろう。

15号カマド（図版19、第22図）

当初1基と考えていたが、整理段階で2基と考えてA・Bに分けた。Aは楕円形プランで、硬化面と北西側に炉壁の一部が残っており、北東側に石の抜き穴らしいものがある。Bは円形プランと考えられ、硬化面はない。板石片が赤化した面の上に残っていたが、カマドの施設の一部かは不明である。AがBを切る。

16号カマド（図版19、第22図）

楕円形プランで、長方形の硬化面だけが残っており、その左右に石の抜き穴がある。硬化面したから13号カマドが検出された。床面が北西に上がっていることから、北西側が焚口と考えられる。

d)埋甕遺構

調査区内から10基の埋甕が検出されたが、上位から発見された1・7～9号埋甕については、近代に属するので写真記録だけ取って掘り上げたため、遺構として記録を残していない。しかし、建物の推定などに役立たせることや近世の土師質甕の変遷解明に役立つ可能性も考え

て、壺は回収している。また、3～6号埋壺については、残存状態が悪いので、写真・図面記録を取っていない。したがって、遺構としては2・10号のみ報告するものとする。2号を除いてすべて土師質大壺で、9号のみが小型で他のものと形態が異なり、内面にカルキが付着する。また、ピット3として取り上げた壺も内面にカルキが付着しているので、便槽として使われたものなので、埋壺とするべきであったが、混乱を避けるため名称変更は行わなかった。

2号埋壺（図版20、第23図）

調査区南端の調査区壁に掛かって検出され、黒色包含層の面からは見えなかった。径112cmの堀り方に正置しており、陶器大壺の底部片が残っているのみである。内面にカルキの付着はなかった。内部はシジミの貝殻が捨てられていた。

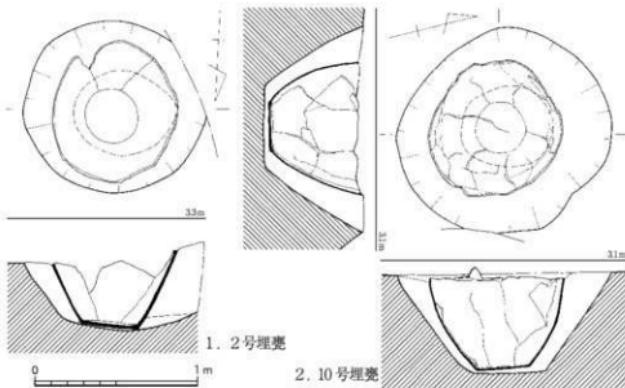
出土遺物の、外面に花唐草、内面に蛸唐草文の染付皿は18世紀中葉から後葉。外面は菊花文のまわりに雪ノ輪文がある染付皿であることから、遺構の時期は18世紀初頭から前葉と考えられる。

10号埋壺（図版20、第23図）

調査区中央北部に位置する土師質大壺の底部でカルキの付着なし。69号土坑に掘り方を切られる。若松文半球碗は18世紀初頭から前葉だが、蛸唐草の退化したモチーフがあることから、本遺構は18世紀前葉から中葉。

e) 井戸

調査区内から4基の井戸が確認された。本遺跡は基盤層だけでなく埋土も強粘土なので、中に入って掘削すると沈み込んで危険なため、どの井戸も底まで掘削していない。そのため、図面が完結するものがないので、図面は掲載していない。また、1から3号井戸は近代に所属するので搅乱扱いとして掲載していない。



第23図 2・10号埋壺実測図 (1/30)

4号井戸（図版20、第3図）

調査区中央北部に位置し、径80cmを測る。危険なため底まで掘っていない。裏込めや井戸枠はなかった。

出土遺物の中に口縁部に鉄軸掛けのある崩れがある肥前産陶器摺鉢があることから、17後半から18世紀前半の所産だろう。

f) 溝状遺構

調査区内から8条の溝状遺構が確認された。

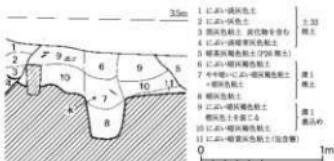
1号溝状遺構（図版2・20、第3・24図）

調査区南東部に位置し、黒色土包含層上位から見えていたが、これを外すことで明瞭に検出された。南北両壁に杭が打たれており、溝内に落ち込んだ横板があったことから、本来は杭と横板で護岸された溝と考えられる。調査区内では唯一裏込めのある溝であった。深さは50cm程度残っており、床面は東の県道側に下がっているので、4号溝状遺構に水を落としていたものと思われる。11・33号土坑、4号埋甕に切られる。

南東部に南に派生して延びる1本の深い溝と細い溝が2本あるが、このうち、幅の広いものは26・41号土坑に切られる。1号溝状遺構の裏込めは残っていたが、派生する溝の底面が浅いことから、1号溝状遺構への排水であった可能性が高い。

出土遺物のうち、外面口縁部が丸く肥厚するものや、内面側に平坦に肥厚する摺鉢は17世紀中葉から末のもので、肥前産銅鏡軸の陶器皿や碗は17世紀中葉から末のもの。また、肥前産京焼風陶器碗は裏銘があるが、見込の鉄軸山水文のモチーフがやや崩れている。また、裏込め内から出土した、内側に平坦に肥厚し、口縁にのみ鉄軸を施す肥前産摺鉢や、外面に横線のみで表現した唐草文の染付皿は17世紀中葉から後葉の所産である。

したがって、本遺構は17世紀中葉から後葉に掘削されたもので、4号溝状遺構と共存することから考えても問題ない。



第24図 1号溝状遺構土層断面図 (1/40)

2号溝状遺構（図版2、第3図）

調査区中央部に位置し、北西-南東方向に走る。東端が12号土坑に接しているが、切り合はない、同時併存の可能性がある。16・23号土坑を切っており、中央部は18号土坑を切っているが、18号土坑中央部は埋土が近似しており、切り合い不明である北西端は2号土坑を切っているが木の根のためその先は不明である。

幅40cm前後ではほぼ均一だが、深さは10cmほどで、西に下がっている。東端の位置で、直角に北方向に3号溝状遺構が走っているので、共存する可能性が高い。出土遺物が少なく、時期を特定する遺物はないが、18号土坑を切るので18世紀初頭から中葉以降であろう。

3号溝状遺構（図版2、第3図）

調査区中央部に位置し、ほぼ南北に走っている。幅30cm前後で、深さ5cmほどしかなく、北半では検出されなかった。南端は12号土坑付近で途切れしており、直角方向に走る2号溝状遺構と共に存する可能性がある。時期を特定する遺物はない。

4号溝状遺構（図版2、第3図）

調査区東端部に位置し、県道に沿って北東・南西方向に走る。西の掘り方が検出されたのみで、最深部は道路下になる。1号溝状遺構は垂直方向に走っており、共存する可能性が高いが、接する位置に電柱があったため、確認できなかった。1から4号カマドの南側で西方向に垂直に派生する小溝があり、明らかに途中で途切れていた。1号カマドは本遺構上に存在している。現存で125cmの幅、40~50cmほどの深さがある。ほかの溝状遺構と比べて規模が大きく、県道に沿っていることから街道の側溝と考えられる。

上層でコンニャク印判の桐文や5葉文、古い段階のモチーフの雨降文の染付碗は17世紀末から18世紀初頭のものである。肥前産陶器大甕片が出土しており、口縁は内側に折れて、外側がやや肥厚することから17世紀後半代の特徴である。これらのことから遺構の時期は17世紀末だろう。

5号溝状遺構（図版2、第3図）

調査区南西端に位置し、5A号と5B号に分けたのは切り合っていたのは間違いないが、1つの溝の掘り直しと考えられるため、1つの溝状遺構とした。5B号は3次調査の2号溝状遺構に対応しており、5A号は3号溝状遺構に対応する可能性がある。

5A号はこの3号溝状遺構の端部で途切れていた。この端部に杭が廻っているので、横木で護岸していた可能性が高い。2号土坑・5号大土坑に切られ、幅200cm、深さ95cm前後で、端部は急に立ち上がる。

5B号は5A号に切られ、東西方向から北に湾曲して走り、5号大土坑に切られる。

出土遺物が少なく、時期の特定は難しいが、3次調査の2号溝状遺構と同一遺構であることから5A号は17世紀後葉から末、5B号はそれ以前なので、17世紀中から後葉と推定できる。

6号溝状遺構（図版2、第3図）

調査区東北端部に位置し、北東・南西方向に走っている。幅32cm前後、深さも10cm前後ほどしかない小溝で、7号溝状遺構に共存する可能性ある。

出土遺物が少なく、時期の特定はできないが、上位からの検出である。

7号溝状遺構（図版2、第3図）

調査区東部に位置し、ほぼ北西・南東方向に走っている。4号溝状遺構を切り、途中で途切れている。垂直方向に走る6号溝状遺構と併存する可能性が高い。幅70cm前後で、深さ10cm前後しかない。

時期を特定する遺物はないが、上位から検出されており、新しいものの可能性が高い。

8号溝状遺構（図版2、第3図）

調査区中央部に位置し、整地面の下から検出された。北西-南東方向に走っているが、西端は搅乱により削られていた。12から14号カマドは本遺構が埋没した後に作られており、57から59号土坑には切られている。幅200cm、深さ25cm前後で西に下がっている。

出土遺物が少なく、時期の特定は困難だが、58号土坑に切られることから、18世紀初頭から前葉以前である。

IV.まとめ

本調査区からは土坑92基、大土坑6基、溝状遺構8条、カマド遺構16基、焼土坑2基、井戸4基、埋甕10基が検出された。柱穴と見られるピットや柱根そのものが残っているピットも存在するが、近世は石場立建物の時期であることから、石の上に柱があることも考えられるので、これらのピットのみから建物を推定復元することは難しい。

そこで、各遺構の配置から復元してみたい。出土遺物については来年度掲載するが、遺構の時期については、出土遺物と切り合い関係をもとに既に各遺構の説明で記載しており、時期別の配置図を作成し、併存する遺構の配置から推定することにする。

1. 建物範囲の復元

建物の配置を想定するヒントとなる遺構は、溝・カマド・埋甕・廃棄土坑である。まず、大きな溝は屋敷地の区画となり、建物は軸方向を揃えると考えられる。カマドは家屋の土間に作られる。埋甕は用途によって土間か家の外に埋め込まれるが、便壺の場合は屋内の奥側で屋内便槽として設置されるか、屋外に置かれるものである。井戸も小型のものであれば屋内の土間に作られることがあるようだが、基本的には屋外に置かれる。土坑は屋内には掘られないものだが、埋甕を掘り上げたり、建て替え時に掘られる可能性はある。薄い炭層が何層も入る土層をもつものや、粗粒が大量に入る土坑・大土坑は長期間廃棄土坑として使用されたことを示すので、屋外の農作業ができる空間の近くに作られているはずである。これらのことから、敷地区画と屋内の範囲と土間の位置が推定できる。

次に、土師質瓦が多く出土することから、これを屋根の谷部に集まる水を排水するものを見る（注1）と、筑後地域の有明海沿岸部に多い漏水形の屋根構造（注2）であることが想定され、建物の平面形体は第25図のようにコ字形と推定できる。

また、包含層から魚網錐の鋳型が出土し、2号焼土坑から鉄滓が少量だがあり、84号土坑からは大型のふいご羽口や多くの土坑で一つなど鋳造関係の遺物が出土しているので、鋳物師の工房があった可能性が高い。火を使う工房なので土間が広いことが想定できる。

これらの材料と、遺構の時期別配置図から建物を想定したのが第25・26図である。最も古い遺構は17世紀後葉のもので、このころ集落が形成された可能性が高い。町矢加部集落は久留米柳川往還の整備に伴って造られた計画集落とされており、中世の遺構が存在しないこともこのことを裏付けている。久留米柳川往還は現在の県道23号線にあったと推定されており、県道沿いに検出された4号溝状遺構は、この街道の側溝であった可能性が高い。

17世紀中葉から18世紀初頭の遺構

最も古い時期の遺物が出土したのは8B・84号土坑、1・5B号溝状遺構であり17世紀中から後葉のものである。1号溝状遺構は、前述した久留米柳川往還の西側溝と考えられる4号溝状遺構に繋がっており、4号溝状遺構からも17世紀後半で遺物を出土することから、同時に併存していたものである。また、同じく4号溝状遺構と繋がり、1号溝状遺構と同じ軸に走る8号溝状遺構は、出土遺物と他の遺構との切り合いから18世紀初頭以前のものである。両者とも調査区東部で他の遺構に切られるものの、2・3次調査区には現れないことから、途中で途切れているものと考えられる。また、5A号溝状遺構は、8号溝状遺構が南に折れた部分の可能性も指摘しておきたい。

69号土坑は17世紀後葉、36・43号土坑は17世紀後葉から末であり、ほぼ同じ時期である。92号土坑、6号大土坑は遺物が少なく時期を特定できないが、90号土坑に切られるので18世紀初頭以前のものである。92号は6号大土坑に切られるので、1時期古いものだから、この時期と考えた。46号土坑は擂鉢片しかないので17世紀中葉から末とする。

17世紀末の遺構は40号土坑・5B号溝状遺構で、17世紀末から18世紀初頭の遺構は27・64号土坑、4B号大土坑、17世紀末から18世紀前葉の遺構は51号土坑である。6号大土坑は90号土坑と辺が揃うので、近い時期のものと考えられる。21・87・90号土坑、4B・5号大土坑は18世紀初頭から前葉で、これらの配置を見ると、調査区南部の1・8号溝状遺構の中間と調査区北部、南西部に土坑の集中があり、調査区西部には大型土坑が集中している。

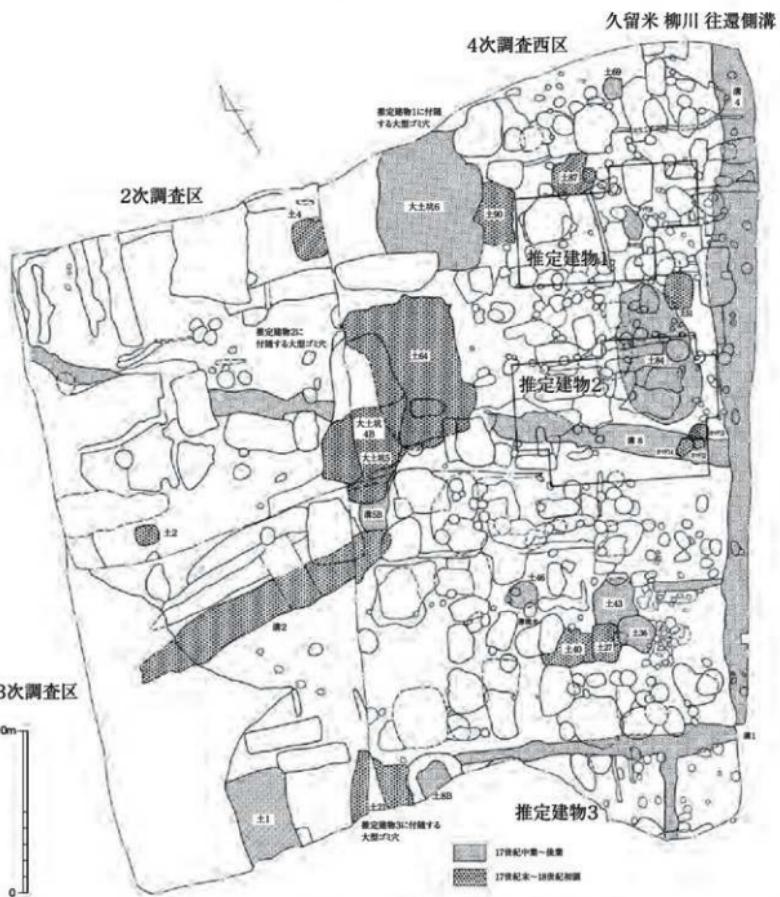
64号土坑は土留があり、8・21号土坑は黒色土の互層が見られるので、長期間使用されたものといえる。こうした土坑が集中する場所は屋外であろう。

46号土坑は後述する藩境木であり、東側の柱列はこれに伴うものだろう。柱列は柵であり、境界を設けたのではないだろうか。46号土坑は17世紀代の1・8号溝状遺構の中間にあり、46号土坑の南東には土坑群があり空閑地である。このため建物があるとすれば、北側の8号溝状遺構との間の細長いものになるが、その建物が存在した根拠がないので、ここでは藩境木を中心とする1・8号溝状遺構との間は空閑地であったと推定しておく。

18世紀前葉から中葉の遺構

13・25・53・55・56・58・61・66号土坑、3号大土坑は18世紀前葉、18・47・49・57・89・50号土坑は18世紀前頭から中葉、24・48・71・73号土坑は18世紀中葉、23・30・33・60・70・75・79・88・91号土坑、4A号大土坑は18世紀中葉から後葉である。

この時期は土坑の集中部が変化している。調査区西部の大型土坑群は4A号土坑が引き続き作られているが、南にずれて25・57・58号土坑、3号大土坑が作られている。8号溝状遺構が埋没して、その付近に47・55・61・75号土坑が作られており、境界としての溝はなくなったものの、建物のない空閑地であったと考えられる。また、1号溝状遺構もなくなっているが、遺物を大量に捨てていた33号土坑が同じ場所に作られており、これも空閑地であったようだ。北部の土坑群は東に移り、48・50・70・71号土坑が作られている。63号は17世紀末から18世紀初頭以降で、この時期に属する可能性が高い。



第25図 矢加部町屋敷遺跡第2・3・4次西区遺構変遷図1(1/300)



第26図 矢加部町屋敷遺跡第2・3・4次西区遺構変遷図2(1/300)

18世紀後葉から19世紀初頭の遺構

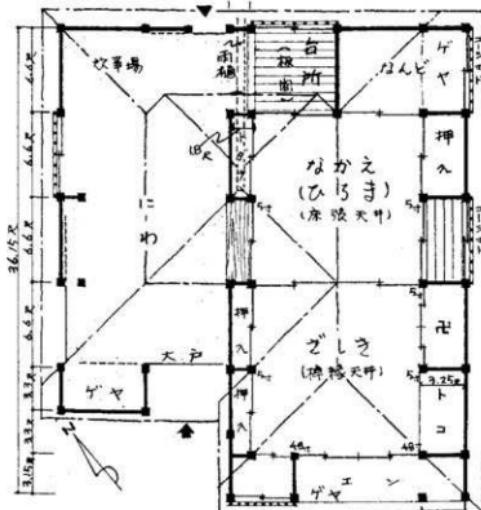
6・10・76号土坑は18世紀後葉、1・67号土坑は18世紀後葉から末、68号土坑・5号溝状遺構は18世紀後葉から19世紀初頭、11号土坑は19世紀初頭、53号土坑は19世紀初頭から前葉、42号土坑は19世紀前葉以前、37・62号土坑は18世紀中葉から後葉以降だがこの時期にあたるだろう。この時期の土坑は前代の集中部を継承している。南部の10・11号土坑は33号土坑、37号土坑は13号土坑を継承している。西部では1号土坑は3号大土坑を、6号土坑は25号土坑を継承している。北部では67・68号に引き継がれている。これは建物の配置に大きな変動がなかったことを示している。

19世紀前葉から19世紀中葉の遺構

3・5・7・8A・9・19号土坑、2号大土坑は19世紀中葉、17号土坑は19世紀前葉、4・39号土坑は19世紀前葉から中葉であり、土坑群は調査区南西部に集中するようになることから、建物の建替えが行われている。4・7・17号土坑から西には建物はなかったようだ。2号溝遺構も上位から検出されたので、この時期のものだろう。

以上のように、土坑群は大きく3つの分期を持って集中部が変化しているので、18世紀前葉・19世紀前葉の2回の立替があったものと思われる。

本遺跡では土師質瓦が多く出土することから、第25図のような漏斗屋根構造であることが想定され、建物の平面形体はコ字形と推定できる。次に、2号焼土坑から魚網錐の鋳型と鉄滓が少量だが出土しており、84号土坑から大型のふいご羽口や多くの土坑でつながるなど鋳造関係の遺物が出土しているので、鋳物師の工房があった可能性がある。工房なので土間は広いこと



第27図 柳川市有明町松藤キヨ氏宅復原図（『福岡県の民家』より）

想定できる。

こうした要素を加味して、カマドの時期を想定してみよう。南部に集中する1から7号カマドは、39号土坑の上に作られているので19世紀代のものである。8から11号カマドは時期を特定する材料がないが、4号溝状遺構に近接しているので18世紀後半代か。12から14号カマドは84号土坑の上に位置しており、隣接する47・55号土坑が18世紀後半代なので、19世紀前半代だろう。15・16号カマドは18世紀後葉の76号土坑に切られ、隣接する67号土坑が18世紀後葉から末なので、この時期ではないことから17世紀後半代のものだろう。

以上のカマドの時期設定から建物を復元してみよう。17世紀中葉から18世紀初頭の段階のものは、8号溝状遺構の北側に復元し、15・16号カマドは2連式のカマドをもつコの字形の屋根の建物を復元した。

18世紀前葉から19世紀初頭の建物は、8から11号カマドをもつ小型の建物が、藩境から53・55・61号土坑群までの間にあり、この土坑群の北側には前述の建物が一回り規模を拡張して復元した。

19世紀前葉から後葉段階では、1から7号カマドをもつ小型の建物と、12から14号カマドをもつ前述のコの字形の建物が大型化したものを復元した。この建物は北側に焼土坑があるので、この周囲を鉄骨工房としたものと考えられ、南半分を居住空間としていたのではなかろうか。南西隅には便壜である5・9号埋臺があるので、ここが便所であり、6・7号埋臺はカマドの近くにあるので、水壜だろうか。

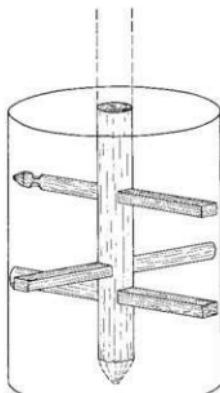
2. 46号土坑の木組遺構について

46号土坑の特殊な木組構造については、遺構の説明で述べた通りだが、第28図に復元イラストを掲載し、概略を再度説明する。

中心となる柱材は径約25cmの柱で、出土する他の建築材より大きい。この柱材の下から検出された下部構造から見ても、この柱は単なる建物の柱の1つではない。

柱には3つの貫通穴があり、十字方向に横木を押し込んでいる。この十字方向の横木があり、横木の端は土坑の壁についておいでいるので、沈み込むこともなく、横に動くこともない。また、押し込まれた横木の上には、径50cm前後の木を短く切った丸木や石が置かれており、このために上に動くこともない。荷重を掛けることが目的なので、他の地域ならすべて石が使われるはずのところに丸木が代用されているのは、柳川市域は有明粘土を基盤としており、川原にも石がないので、礫石が入手しにくい地域であるためだろう。

このような木組構造は調査区内に1基しか見つかっていないので、掘立柱建物跡を構成する柱跡とは考えられない。つまり、単独で機能する柱といえる。前述したような下部構造は、どの方向にも動かないことを企図した



第28図 46号土坑木組模式図

ものであるので、抜き取りを防止していたと考えられ、これは藩境木と考えられる。藩境の境界には風化しにくい石柱を使用することが多い。しかし、柳川・久留米藩境には木柱を使用したことについては、文献にも記されているし、実際、県道23号上には藩境木跡の石碑が建っている。これは正保元（1644）年に幕府が作成を命じた国絵図作成事業との関連が示唆されている「三瀬郡蒲池与地図」（注3）にも位置が描かれているもので、街道上に位置する藩境木の位置が違っているわけではない。別の藩境木があったのではないだろうか。

吉原家文書『当御領小保北ノ寺忠平前、久留米領復津本町、御境取合手控』文化十三年（1816）年四月十四日（注4）によると、柳川領民が領境の道が低くなったので土持をしたところ、立合いを求めなかったことから論争となり、民家軒下に境木を建てたが、これが引き抜かれたため、建て替えたという記述がある。境界争いが生じた際に解決手段として、隨時設置されることもあったようだ。また、完全に境界上に置かれるのではなく、どちらかの領内に入り込むこともあつたらしい。

引き抜かれた後の建て替えであったので、下部構造の記載があった。「境木の下二方に貫を入れ、地下に五尺掘り入れて、貫の上に石を置いて埋めた。」とあり、46号土坑の木組遺構に酷似している。この境木は、面が6尺4分（1.92m）、長さ1丈2寸余り（3.6m）と記録されており、面を地上部分と考えると、地下部分は1.7mとなり、46号土坑の深さは1.5mで柱は床から30cmほど沈み込んでいるので、地下部分は1.8mとなり、ほぼ等しい。絵図を見ると、建てたのは1本のみで、一定間隔を置いて立て並べたものではない。

これらことから、46号土坑は町矢加部の領境を定めた基点として置かれたものと考えられる。出土遺物がわずか摺鉢の口縁部片1点しかないが、17世紀中葉から末のものであり、17世



第29図 久留米・柳河両藩立合境木建絵図（大川市誌より）

紀中葉をとれば本集落の最古段階の遺構となるので、集落成立期から存在したことになる。

3. 土留め構造について

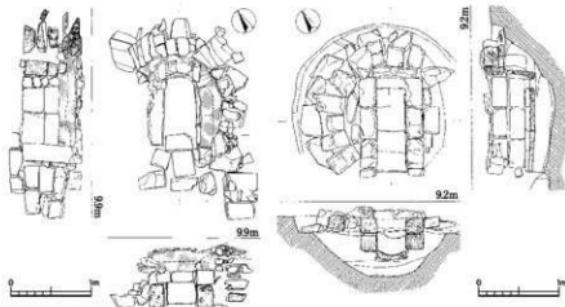
64・83号土坑、4号大土坑に木組構造が見られる。これらは、小さい竹を隙間なく並べて基盤層に挿し込み、竹の上位が倒れ込まないように横木で抑え、横木を基盤層に打ち込んだ杭と結わえていたものと考えられる。通常の土留めは礫石を積み上げて石垣状に構築するが、前述したように柳川市域は礫石が入手しにくい地域であるため、このような特殊な土留め構造になつたものと考えられる。同じような竹杭列は博多遺跡群第29次調査（注5）でも検出されており、やはり海岸の干潟地での埋め立て工事に伴う土留であった。

64号土坑の土留め遺構は長期間使用するため、壁が崩落しないように設置されたものと思われる。こうした廃棄土坑には水が溜まるので、薄い堆積層はこの水成層であり、溝がそばにあるのは排水のためであろう。64号土坑からは鋤が完形で出土しており、水漬けしていたものかもしれない、水貯めの可能性がある。

4. カマド遺構について

本調査区では16基のカマド遺構を検出したが、江戸時代のカマドは古墳時代から奈良時代のカマドのように竪穴住居の壁に造りつけるものではなく、平地式住居に壁から離れて単独で存在しているため、壁体が残っていることはほとんどなく、検出は困難である。また、江戸時代の絵画資料に見られる町屋では、家屋の面積が狭いことからカマドは木製の台の上に造られており、遺構面に構造物が残らないので、発掘調査で検出されることはない。したがって、カマド遺構が発見されることはほとんどない。しかし、民家では土間につくりつけられるので、床面に残ったのである。

今回は基盤層に火床と見られる方形の焼土の広がりと、その側面に板石が埋設してあったことから、カマド遺構と判断した。古墳時代から奈良時代のカマドの壁体にも、粘土の中に石の補強材が使われており、本遺構の板石も同様のものであったのだろう。久留米市両替町遺跡（注6）で検出されたカマド遺構は大型のもので、石造りだが、構造的には同様のものであったと



第30図 久留米市両替町遺跡カマド遺構図

考えられる。円形プランのものは、板石はないものの、同じ位置にあることから、これもカマドと判断した。カマドの形態には同時期に円形と方形の2種類があったのではないだろうか。これは前述の松藤キヨ氏宅の復原図にも見られ、ここでは「へっつい」と「クド」として呼称を分けている。

本報告は4次調査西区の遺構編であり、遺物については来年度の4次調査東区と5次調査区の報告に併せて掲載する予定である。

注

- 注1 福岡県教育委員会 2007『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集
- 注2 福岡県教育委員会 1972『福岡県の民家 民家緊急分布調査報告書』
- 注3 柳川市史編集委員会 1999『三瀬郡蒲池与絵図』『地図から見た柳川－柳川市史地図編－』
- 注4 九州歴史資料館分館 柳川古文書館 1995『柳川古文書館史料目録第8集 吉原家文書目録』
- 大川市誌編集委員会 1967『大川市誌』
- 注5 福岡市教育委員会 1987『博多Ⅷ－博多遺跡群第29次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集
- 注6 久留米市教育委員会 1996『両替町遺跡』久留米市市埋蔵文化財調査報告書第116集

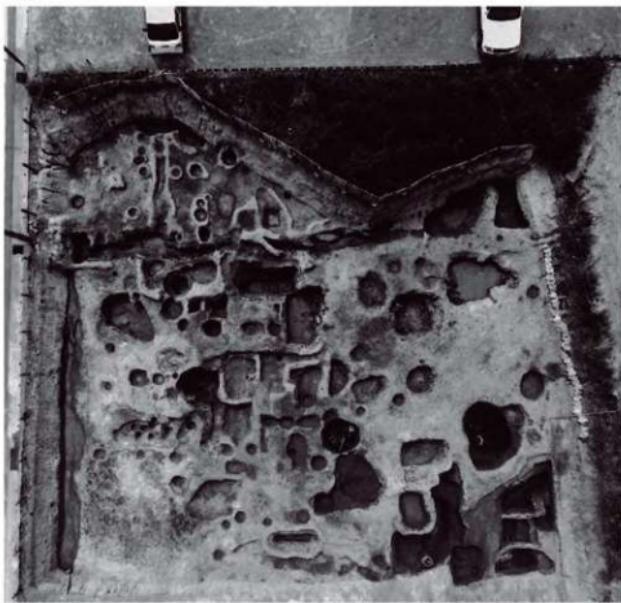
図 版



1. 矢加部町屋敷遺跡 4次調査西区北半全景（南西から）



2. 同上南半東部（北東から）



1. 矢加部町屋敷遺跡
4次調査西区南半
全景（上空から）



2. 同上北半
(上空から)



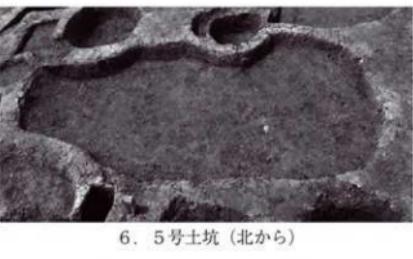
1. 1号土坑（南から）



3. 3号土坑（北西から）



2. 1号土坑土層断面（南東から）



6. 5号土坑（北から）



4. 4号土坑（南東から）



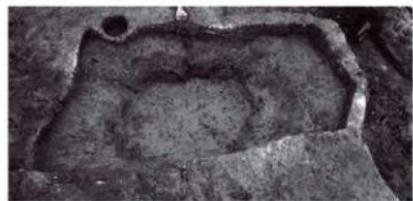
7. 5号土坑土層断面（南東から）



5. 4号土坑土層断面（南東から）



8. 6号土坑（南東から）



1. 7号土坑（北西から）



6. 10号土坑（北から）



2. 7号土坑土層断面（北東から）



7. 10号土坑土層断面（北から）



3. 8a・b号土坑（北から）



8. 11号土坑・1号井戸（西から）



4. 9号土坑（北から）



9. 11号土坑土層断面（東から）

5. 9号土坑土層断面（北から）



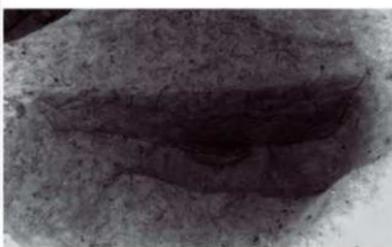
1. 12号土坑（北東から）



5. 15号土坑（西から）



2. 13号土坑（北から）



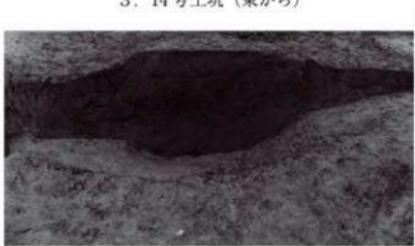
6. 15号土坑土層断面（南東から）



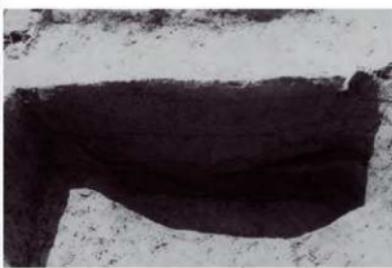
3. 14号土坑（東から）



7. 18号土坑（西から）



4. 14号土坑土層断面（西から）



8. 18号土坑土層断面（東から）



1. 19号土坑（北西から）



5. 25号土坑（西から）



2. 19号土坑土層断面（西から）



6. 25号土坑土層断面（南から）



3.
21号土坑
(北から)



7. 26号土坑（南西から）



4. 21号土坑土層断面（北東から）



8. 35号土坑（北西から）



1. 32号土坑（北西から）



3. 41号土坑（北西から）



2. 39号土坑（北西から）



4. 42号土坑（北東から）



5. 36・43・49号土坑（上空から）



1. 33・44号土坑遺物出土
状態1（北西から）



2. 同上2（南東から）



3. 同上3（南東から）



1. 46号土坑土層面（北から）



2. 46号土坑柱部検出状況（北西から）



3. 46号土坑基礎部上位検出状況（東から）



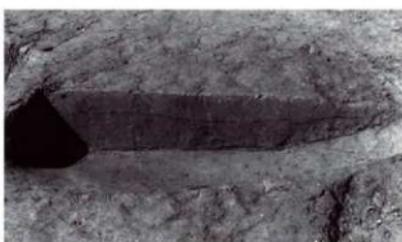
4. 同左下位検出状況（東から）



5. 48号土坑（東から）



7. 49号土坑（西から）



6. 48号土坑土層断面（東から）



8. 49号土坑土層断面（西から）



1. 50号土坑（南東から）



4. 54号土坑（南東から）



2. 50号土坑土層断面（南東から）



5. 54号土坑土層断面（北西から）



3. 51・52・78・80号土坑（上空から）



6. 56号土坑（南西から）



7. 57・58号土坑（南西から）



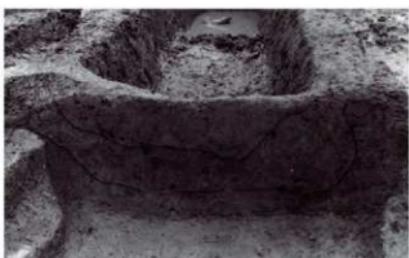
8. 57号土坑（南東から）



1. 60号土坑（西から）



5. 62号土坑（西から）



2. 60号土坑土層断面（北から）



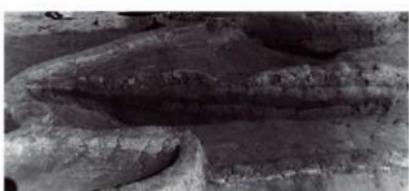
6. 63号土坑（南西から）



3. 61号土坑（北西から）



7. 63号土坑土層断面（南西から）



4. 61号土坑土層断面（北西から）



8. 64号土坑土層断面（南から）



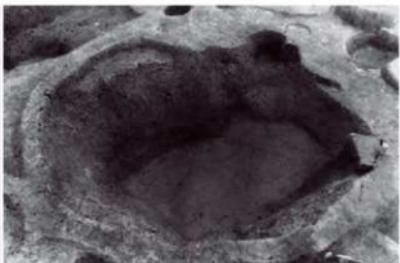
1.
57
58
64号土坑、4・5号大土坑
(上空から)



2. 64号土坑土留構造(南から)



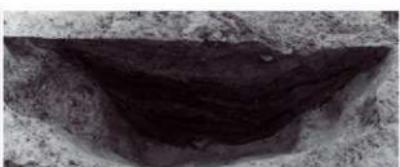
1. 66号土坑（北西から）



5. 68号土坑（北西から）



2. 66号土坑土層断面（北西から）



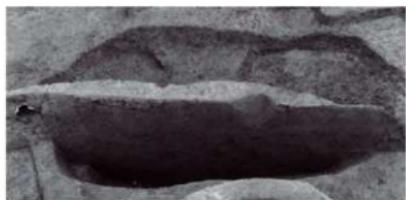
6. 68号土坑土層断面（北から）



3. 67号土坑（北西から）



8. 71号土坑（北東から）



4. 67号土坑土層断面（北西から）



9. 71号土坑土層断面（南西から）



7. 69号土坑土層断面（北から）



1. 72・74・81・83・90号土坑（上空から）



2. 73号土坑（北西から）



3. 73号土坑土層断面（南東から）



4. 75号土坑（南西から）



6. 76号土坑（南東から）



5. 75号土坑土層断面（南西から）



7. 79号土坑（南西から）



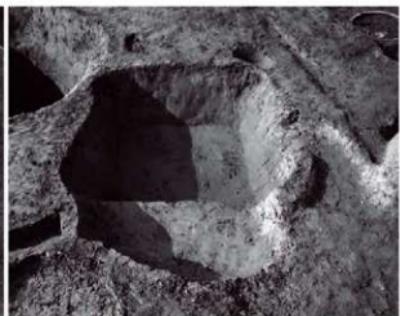
9. 82号土坑（南東から）



8. 80号土坑（南東から）



1. 83号土坑（北西から）



4. 87号土坑（南東から）



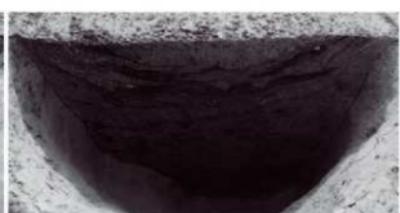
2. 同上（南西から）



5. 88号土坑（北東から）



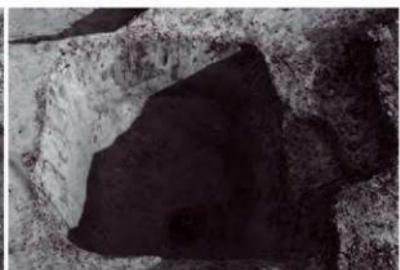
3. 同上土層面・同上土層断面（北西から）



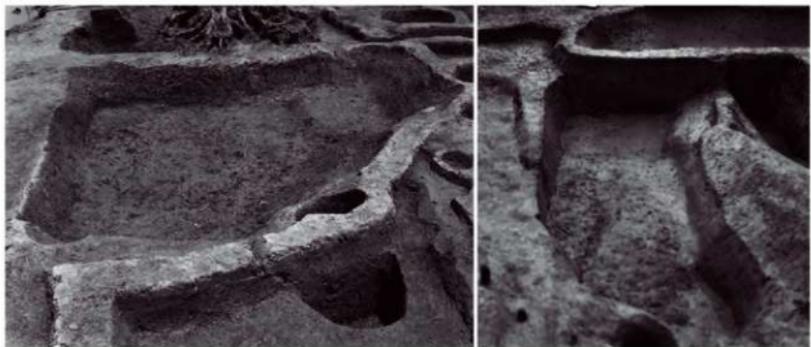
6. 88号土坑土層断面（南西から）



7. 89号土坑（上空から）

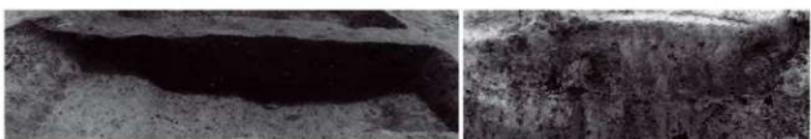


8. 91号土坑（南西から）

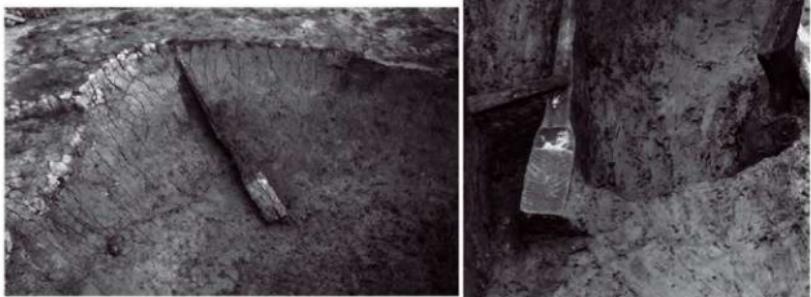


1. 2号大土坑（南西から）

7. 6号大土坑（北西から）



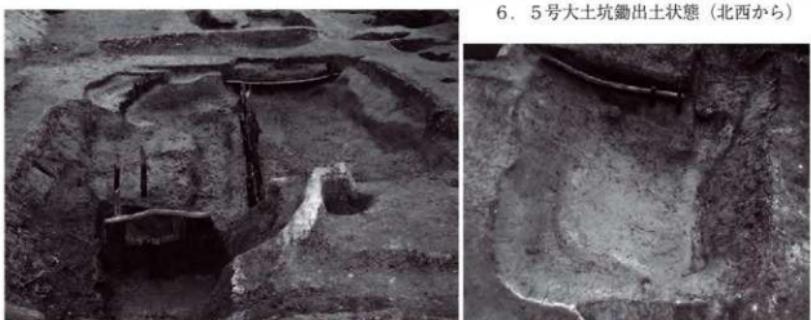
2. 2号大土坑土層断面（北から）



3. 4号大土坑鎧出土状態（北西から）



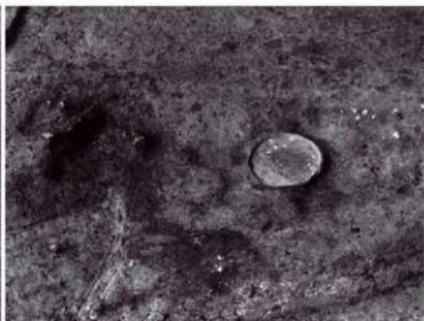
6. 5号大土坑鎧出土状態（北西から）



4. 64号土坑・6号大土坑（南西から）



5. 4号大土坑（南西から）





1. 3～7号カマド遺構
(北西から)



2. 5号カマド遺構
(南東から)



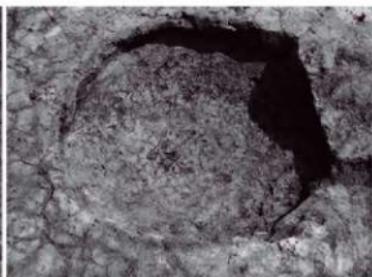
3. 8号カマド遺構 (南西から)



4. 9号カマド遺構 (西から)



1. 10号カマド遺構（南西から）



3. 11号カマド遺構（南西から）



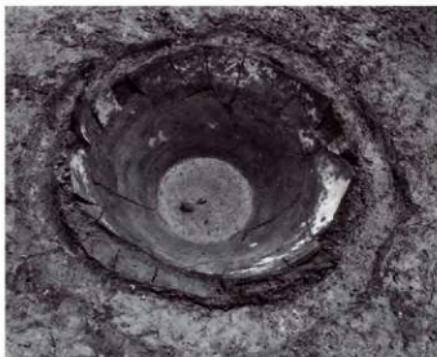
2. 10号カマド遺構土層断面
(南西から)



4. 12~14号カマド遺構
(南西から)



5. 15・16号カマド遺構
(南西から)



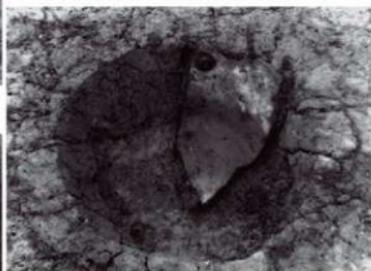
1. 1号埋甕（西から）



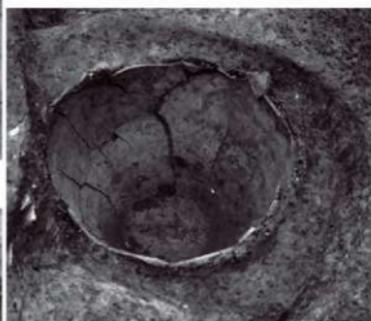
3. 7号埋甕（東から）



2. 2号埋甕（北から）



4. 8号埋甕（南から）



5. 10号埋甕（北から）



6. 1号溝状遺構土層断面（北西から）



7. 4号井戸（南から）

報告書抄録

ふりがな	やかべまちやしきいせき							
書名	矢加部町屋敷遺跡Ⅱ							
副書名								
卷次								
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第9集							
編集者名	秦 恵二							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦 2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東緯 ○○'	調査期間	調査面積	調査原因	
やかべまちやしき 矢加部町屋敷 4次調査西区	ふくおかひんやながけし 福岡県柳川市 やかべ 矢加部 あさまちやしき 字町屋敷	402079	140392	33° 10' 45"	130° 24' 43"	2006.5.9 2007.1.30	1,200 m ²	国道 バイパス
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物（次年度掲載予定）			特記事項	
矢加部 町屋敷遺跡	集落	江戸 明治 大正 昭和	土坑 大土坑 焼土坑 埋甕 井戸 溝状遺構 カマド	92 6 2 10 4 8 16	・土器類 ・瓦質土器 ・陶器 ・容器形木製品 ・土人形 ・瓦 ・下駄 ・白 ・不明土製品 ・建築材	・ガラス製品 ・銅鏡 ・るつぼ ・土人形 ・下駄 ・白 ・硯	藩境木	
遺跡の概要								
本遺跡は江戸時代の町屋跡の端部にあたり、17世紀中葉から現代にいたる遺構・遺物が見られ、連続と集落が営まれていたことが分かった。今次調査区の久留米柳川街道沿いにはカマド群があり通りに面して並ぶ建物群の存在が想定される。								
18世紀中葉から飛躍的に遺物が増加し、多くの土器・陶磁器類が出土したが、中でも鋳造関係の遺物が注目される。また、近世の筑後地方に見られる土師質の瓦や高熱を受けた不明土製品も多量に出土している。								

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第9集

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 21	登録番号 8

矢加部町屋敷遺跡Ⅱ

平成22年(2010)3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 コミヤ印刷
〒835-0013 福岡県みやま市瀬高町太神 1359-2